



Title	魯迅傳覚書：その沈潜期を中心として
Author(s)	猪俣, 庄八
Citation	北海道大學文學部紀要, 9, 107-144
Issue Date	1961-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33258
Type	departmental bulletin paper
File Information	9_P107-144.pdf



魯迅傳覺書

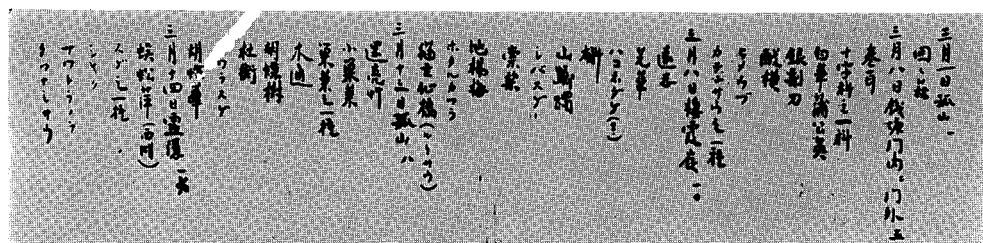
—その沈潜期を中心として—

猪俣庄八



《魯迅帰国当時の写真（1909年杭州にて摂す）》

《浙江兩級師範學校の時に編纂した『生理
学、講義の一頁』》



《浙江兩級師範學校の時に杭州西湖付近で採集した植物標本の記録》

“越鐸日報”出世辭

黃 棘

于越故都無放于天下，海岱無疆，蒼生遘界，后先絡繹，屈其殊才，其民復存大禹卓苦勤勞之風，同勾踐憂餓餒之志，力作節生，粹然足以自強，世俗遞降，精氣播遷，則漸享安和而輕怠，玩安適而忘武備，膏夷癘之，受包圍限，全體之士，休德頹頹，而黃神嗷嗷，民不再振，蜷蜷前驅之虞，所蓋引弓之民，刑步于無余之旧壘者，蓋二百余年矣。已而烈士篇生，上通帝旨，轉輸之使，踰滄大區，國士相和，則首舉又振于郭，薄地頑說，誘起萬民，舉翼故物，走逐太平，東南大邦，亦赫然歸其主人，越人于是得三大自由，以見生干端，索請願其無量罪惡，以底于亡，民氣彭張，天日騰笑，觀者贊頌，庶幾偉之，將光街台矣。願寡制久長，創維為政，以堅執其高體，以禁令制其流平，府貼情結，為日滋永，徑路頓解，卷懷尚多，民神寂寞，群古幽咽，豈以為匹夫歸与于天下，何如戴胡北之虞也。共和之始，人任于肩，同為主人，有殊台錄，則此罪惡，既成以歸索諸，蒙塵不克負荷，俱以阻落矣。雖自今而天下興亡，諸人負責，使竟不同力合作，為棄士謀，復見得弱情結，一如往日，則番番良士，其其將誰咎耶？是故停倫則急之矣，也立後始，且並七旬，替者竭慮，勇士効命，而吾越國士，坐視其成，懷不盡一得之志，始自放于國民之外。爰立斯報，就海同規，華文宣意，希冀治化，抒自由之旨論，展個人之天賦，促共和之進行，尺政治之得失，發社會之衰復，振勇毅之精神，激憤真知，揭表方物，凡有如是，其其顯愚，力小願宏，全于改進，不欲守口，任職士更歸寂寞，復自無無量罪惡，以續前塵，庶几聞者戒勉，收效毫厘，而吾人公民之責，亦借以肩其什一。為此于越，故非無放于天下，覽夷癘之，民生稿枯，今者解除，又當就律，用振古先哲人征營治理之業，雖毒網永長，昭亦非易，況復神馳白水，就難回鄉，返顧高丘，正良無及，嗚呼，此越鐸之所由作也。

附省案：这篇“越鐸日報”發刊辭，是魯迅先生用“黃棘”筆名，發表在1912年1月3日越鐸第一卷上的，原題叫做“出世辭”。“越鐸日報”由王文瀾等幾個青年辦，請魯迅、陳子美、徐復等列名發刊，是一張由王余慶王余慶的報紙。這份刊刊由紹興登報館登報後，因紙文用米磨印，字跡頗多模糊，經考訂校正，特為發表如上。

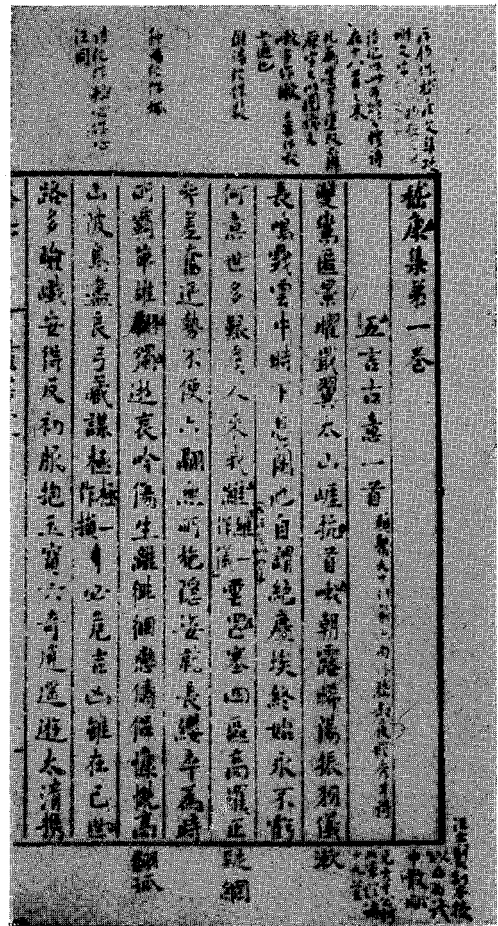
《魯迅が黄棘という筆名で発表した『越鐸日報・発刊詞』》



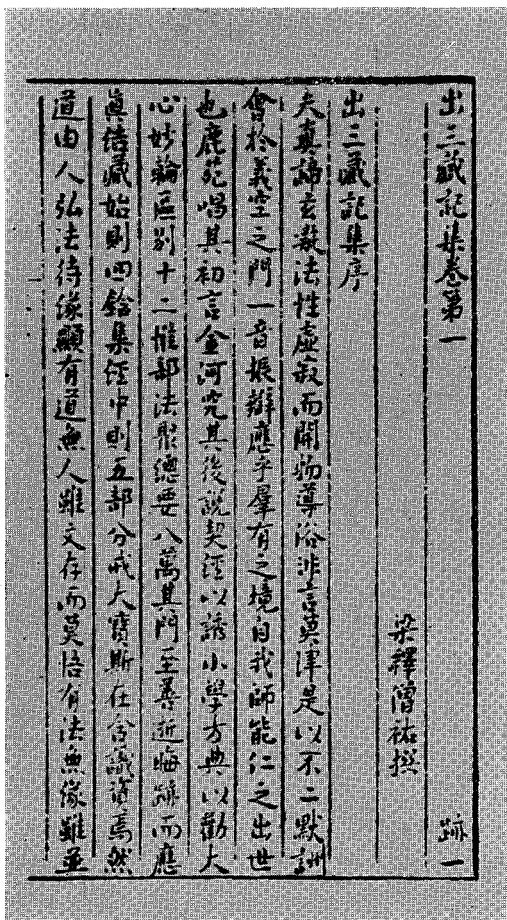
《魯迅の最初の試作小説『懐旧』の挿画》



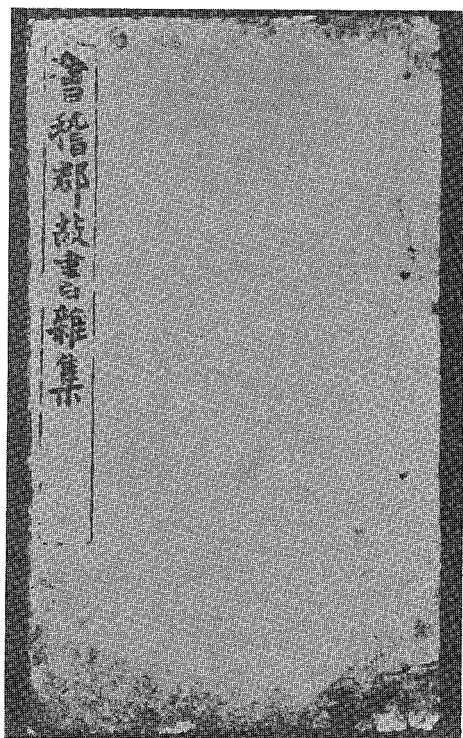
《魯迅が寓居した（1912～19）北京宣武門外南半截胡同の紹興県館》



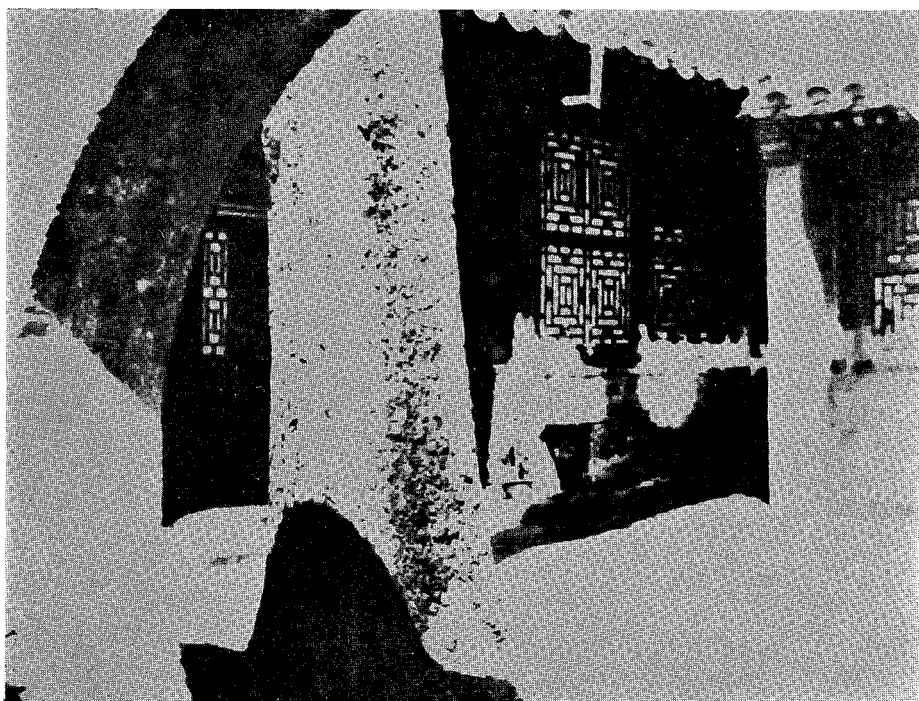
《魯迅が抄写した『嵇康集』の一頁》



《魯迅が抄写した仏經『出三藏記集』の一頁》



《魯迅が輯録した『会稽郡故書雜集』》



《魯迅が住んだ紹興県館内の楠樹書屋》

魯迅傳 覺書

—その沈潜期を中心として—

猪 俣 庄 八

目次

- (一) 帰国—教員生活—辛亥革命
- (二) 官吏生活—古書の校勘・輯佚工作
- (三) 仏経—古碑の抄写工作
- (四) 張勳の復辟—文学革命—錢玄同の勸告
- (四) 結語
- 附録 魯迅年譜補遺

魯迅關係写真十葉

“絶望之為虚妄，正与希望相同”

—魯迅「自選集自序」—

(一) 帰国—教員生活—辛亥革命

魯迅が留学八年に及ぶ日本をあとに帰国したのは、一九〇九年（二十九歳）六月（陰曆）であつた。許寿裳編「魯迅先生年譜」（以下「年譜」と略称）には『六月帰国、任浙江兩級師範学堂生理学化学教員。』とみえる。この帰国年代については、魯迅自身も『我便回到中国来，這時我是二十九歳。』（「自叙伝略」——「集外集」）と述べている

北大文学紀要

のであるが、ただ周作人は『魯迅於庚戌（一九一〇年）^{（筆者）} 帰国、』（「關於魯迅」）と述べ、また李長之も『他説是二十九歲回的国，那末，是在一九一〇年。』（「魯迅批判」）と述べており、その間に一年の差異が認められる。しかし、この一九一〇年説に対してはすでに林辰がその矛盾を明確に指摘しており（「魯迅帰国の年代問題」——「魯迅事蹟攷」）、さらに、同年四月（陰）帰国して浙江兩級師範の教務長を勤めていた許寿裳自身が再確認している（「帰国在杭州教書」——「亡友魯迅印象記」）以上、一九〇九年の正しいことにはもはや問題はない。周作人の説はおそらく記憶違いであらうし、また李長之はその説を踏襲したところから誤つたのであらう。

さて、当時の魯迅の文学運動への熱情と抱負とを併せ考えれば、たとえそれが挫折に遭遇したとはいへ、この帰国はいかにも唐突の感を免れない。魯迅はなぜこのように急遽帰国したのであらうか。その理由について許寿裳は次のように急遽帰国したのであらうか。その理由について許寿裳は次のように述べている。『這因為作人那時在立教大学還未畢業，卻已經和羽太信子結了婚，費用不夠了，必須由阿哥資助，所以魯迅只得自己犧牲了研究，回国来做事。魯迅在自伝中，所謂「終于，因為我的母親和幾個別的人很希望我有經濟上的幫助，我便回到中国来」，幾個別人者，作人和羽太信子也。』（「關於「弟兄」——「我所認識的魯迅」）

これに拠れば、魯迅の帰国は經濟上の理由に促がされたものであつたことが知られる。周家の長男としての魯迅が故郷の母親及びその他の人々への經濟的援助の必要に迫られたことはそこにも引用されているように「自伝」すなわち「自叙伝略」に魯迅自身が述べていることで疑問の余地はない。なお許寿裳は『幾個別人』を當時立教大学に留学していた周作人と妻の羽太信子の二人を指すとしているが、これの裏付けとして、同年四月（陰）帰国する許寿裳に対して『你回国很好，我也只好回国去，因為起孟將結婚，從此費用增多，我不能不去謀

事、庶幾有所資助。』(「帰国在杭州教書」——「亡友魯迅印象記」と語つたという魯迅の言葉を記録しており、傍証となる。つまり、魯迅は故郷の母親及び起孟(周作人)夫妻への経済的な援助を考えなければならず、帰国して職に就く必要に迫られていたことが知られるわけである。なお、この浙江兩級師範学堂への就職は、教務長許寿裳を通して校長沈鈞儒⁹⁾へ推薦されたものであつた(同)。

さて、この教職は魯迅が公的に従事した教師としての第一歩であるが、その当時の魯迅の教師ぶりについては、やはり同僚の許寿裳が『魯迅教書は循循善誘的、所編の講義は簡明扼要、為學生們所信賴。他燈下看書、每至深夜：』(同)と述べ、毎夜深更に及ぶまで燈下に書を翻とき、學生達の信賴も厚かつた教師魯迅の姿を偲ばせており、また、『他在杭州時、星期日喜歡和同事出去采集植物標本、徘徊于吳山聖水之間、不是為遊賞而為科學研究。每次看他滿載而歸、接着做整理、壓平、張貼、標名等工作、樂之下疲、弄得房間裏堆積如丘、琳琅滿目。』(「民元前的魯迅先生」序)——「我所認識的魯迅」と述べ、休日などには同僚とともに植物採集のために近傍の山水の間を徘徊し、孜孜としてその標本の作製、分類などに没頭している姿を写している。

魯迅が担任したのは前記のように『生理学化学』(「年譜」)であるが、その中の生理学関係について特筆に値するものとしては、彼が生理学講義用として編定したテキスト「人生象徴」(唐弢編「魯迅全集補遺統編」所収)を挙ぐべきであろう。ここではその専門的評価は論外とするほかはなく、またその編定にはあるいはかつての仙台医専における修学が大いに役立っていることも推察されるのであるが、それにしてもその緻密、周到さにはひたすら驚嘆のほかはない。その校訂者唐弢はとくに生理学用語の漢訳という面からして『先生對於文字学極有根柢、用字頗為講究、』と述べ、その実例のいくつかを列挙しているが、『魯迅全集補遺統編』編校後記——「向魯迅學習」、魯迅の

『文字学における造詣』とそこに払われた並々ならぬ苦心のほどが窺える。さらに、当時の同僚の一人であつた夏巧尊は、魯迅が学生の要望に応じて、その頃としては未曾有の生殖系統の講義をも行つたことを述べ、同時に訳語の苦心を伝えている(「魯迅翁雜憶」——「憶魯迅」)。

つぎに、化学関係については、当時の学生の一人であつた孫福熙¹⁰⁾が化学教師魯迅にまつわる次のような想い出を記している。すなわち『魯迅先生是人道主義者、他想尽量的愛人：然而他受欺侮、而且因為愛人而受人欺侮。倘若他不愛人、不給人以輕氣瓶口混入空氣燃燒時就要爆裂的智識、他不至於炸破手。』(「我所見『示衆』者」)というのである。なお、これについては註解があるが、それによれば、水素の燃燒実験の授業中マツチを忘れたことに気がついた魯迅は、水素瓶に空氣を入れると燃燒の時に爆発するからと注意して教室を出る、ついで教室にもどつて点火するや俄然爆発し、彼の手が鮮血に染まつた、というのである。魯迅が人道主義者であることについては勿論異存のありよう筈はないが、ただこの一事件の原因として魯迅が限りなく人を愛したればこそであるとする孫福熙の論の進め方にはかなりの飛躍が認められるようである。しかし、それはともあれ、これが化学教師としての魯迅の一面を伝える一つの挿話であることに相違はない。

なお、魯迅が担当した科目はすでに前述したように『生理学化学』の二つであるが、それ以外にも、たとえば夏巧尊が『那時兩級師範学校有許多功課是聘用日本人為教師的、教師所編的講義要人翻譯一過、上課的時候也要有人在旁边翻譯。我和周先生在那里所担任的就是這翻譯的職務。』周先生担任生物学科方面的翻譯。』(「魯迅翁雜憶」——「憶魯迅」)と述べているように、当時招聘された日本人教師の講義の翻譯(生物学)及び通訳の仕事をも担当したわけである。

以上述べたいくつかの記録を通してわれわれは、かつての念願の一つであつた科学の教育に専心する誠実な青年教師魯迅の姿を彷彿することができようであらう。

ついで、一九一〇年（三十歳）、「年譜」に『四月初五日祖母蔣太君卒、年六十九。』とみえるように、この年の四月五日（陽曆五月十三日）に祖母蔣太君が六十九歳で歿した。祖母危篤の報に接した魯迅は急遽郷里紹興へ帰り、葬儀萬端をとり行つたが、その時の模様を彼は後に小説「孤独者」（「彷徨」）において描写している。因みに、蔣太君は祖父介孚公の後妻、父伯宜公の継母にあたる人で、彼女の生涯を魯迅は『親手造成孤独、又放在嘴里去咀嚼的人』（「孤独者」）と表現し、その暗い運命に同情を寄せているのであるが、そのような祖母の死目にもあえず、看護もかなわなかつたことが、彼としては心残りでもあつたろう。

さて、この浙江兩級師範学堂の在職期間はほぼ一年にしかすぎず、『八月、任紹興中学堂教員兼監学。』（「年譜」）とみえるように、この年の八月（陰）に紹興中学堂の教員兼監学に転任した。これは魯迅自身も『我一回国、就在浙江杭州的兩級師範学堂做化学和生理学教员、第二年就走出、到紹興中学堂去做教務長、第三年又走出。』（「自叙伝略」）と述べており、対応される。この転出の理由は必ずしも明白にされているわけではないが、当時師範学堂の校長と教員間に生じた確執を許寿裳は次のように伝えている。すなわち、校長沈鈞儒は諮議局副議長に選任され、後任として夏震武を迎えたが、夏は道学者を以て自任する人物で、孔子廟への礼拝を強要するなどかくの風評があり、ついに教員と衝突し、許寿裳及び魯迅等多くの教員は陸統と辞意を表明して夏と対決したが、結局は夏がやむなく辞職するというところでこの事件も一応落着をみた（『帰国在杭州教書』―「亡友魯迅印象記」、

というのである。もちろん許寿裳はこの事件を直ちに魯迅の転出と結びつけて述べているのではないが、この事件は当時に普遍的ないわば新旧の衝突のあらわれであり、そのような紛糾が魯迅をして該校に安住せしめえなかつた一つの背景になつたであらうことは想像に難くない。

この紹興中学堂の教員兼監学の魯迅については、その当時の学生の一人であつた胡愈之が次のように伝えている。『那年紹興府中学堂の学監は周予才先生、就是後來用魯迅の筆名写文章的那位作家。他在我們這一級、每週只授生理衛生一小時、但在学校裏以嚴厲出名、学生沒有一個不怕他。：那年上半年、革命雖未發動、排滿空氣已到処瀰漫、紹興又是革命策源地。在不久以前被清廷捕殺的革命党徐錫麟・秋瑾都是紹興人。那時紹興府中学堂の校長陳先生和学監周予才先生、都是日本留学生、学生們都知道他們兩人是和同盟会及徐錫麟有過關係、雖然逢着聖誕日、他們都戴上假辮子、率領学生向萬歲牌跪拜。但学生們都明白他們是革命党、是不得已而為之、因之對他們起了敬意。』（在紹興中学堂）¹⁰⁾

これに拠れば、魯迅は生理衛生担当の嚴厲教師であり、また、かつて排滿革命の途上に斃れた同郷の志士徐錫麟、秋瑾の同志として校長陳子英とともに学生の畏敬のまゝであつたことが知られる。もつとも、これは学生の眼から見た教師魯迅の映像であつて、彼自身の立場にはかなり憂鬱なものがあつたようであり、それを魯迅は次のように述べている。『宣統初年、我在本地的中学校做監学、同事是避之惟恐不遠、官僚是防之惟恐不嚴、我終日如坐冰窖子裏、如站在刑場旁、其実並非別的、只因爲缺少了一条辮子！』（「頭髮的故事」―「呐喊」）

つまり、魯迅は一本の辮髪を欠いているために同僚からは敬遠され、官僚からは監視され、恰も終日氷の穴倉が刑場の辺りに立つてゐるような氣持であつた、というのである。魯迅が日本留学当初すでに辮髪

を剪り落したことにについては別稿において述べたが、その辮髪にまつわる紛糾がここに至るまで延長されているわけである。かつて排滿革命への志向から辮髪を剪り落した留日学生も帰国後は国内情勢に順応して假辮髪をつけるのが普通であつたが、魯迅は、しかし、依然として短髪のままであつた。¹⁹⁾その当時、断髪は紹興中学堂にまで波及し、数名の学生が魯迅を訪れて断髪の希望を述べ、その同意を求める。しかし、魯迅はそれには賛成しない。学生達は魯迅の回答に頗る不満であり、その言行不一致を難詰し、ついに辮髪を剪り落してしまふ。断髪をめぐる魯迅と学生との間の以上のような応酬は「頭髮的故事」(「呐喊」)及び「病後雜談之餘」(「且介亭雜文」)にそれぞれ説かれているが、これに関して王治秋は『他在當時為甚麼不主張學生剪辮子呢？那原因可以猜想得到，剪了辮子，并不是就算革了滿清的命。何必在沒有其他實際的動作之先，先弄成了“葫蘆瓢”，惹人注意呢？——這種“戰略”“退却”主張，当然不會為熱情冲動的青年學生所諒解，所以他便背了“言行不一致”的毀謗。』(「辛亥革命前的魯迅先生」)と述べ、学生の断髪に賛意を表しかねた魯迅の心情を臆測している。ともあれ、やがて来るべき革命をひかえた複雑微妙な情勢を背景にして学生達の辮髪の処置に対しては、さすがに魯迅も困惑したであろうことが偲ばれる。

この年、魯迅は計らずも范愛農に再会している。かつて東京留學時代に徐錫麟、秋瑾事件にあたり、同郷会の席上滿清政府に打電してその非道を痛撃すべしとする発言にことごとく反対して魯迅を大いに憤慨させた、かの范愛農である。数年後に再会した范愛農は頭に白髪を交え、古びた木綿の馬褂に破れた布鞋という、いかにもうらぶれた風采であつた。彼自身の語るところによれば、その後、學資が不如意で留學を続けることができず郷里に帰つたが、輕蔑、排斥、迫害を蒙り、今は田舎にかくれ少数の小学生を相手に僅かに糊口をしのいでい

る状態であるというのであつた(「范愛農」——「朝華夕拾」)。范愛農のこのような落魄の理由として喬峯(周建人)は、留學時における學校の選択に由るとし、彼が入學した物理學校は私立であり、帰國後の資格も他の學校(大學、專門學校)に及ばず、従つて社會から歡迎されなかつた旨を述べている(「魯迅任紹興師範學校校長的一年」——「略講關於魯迅的事情」)。これはいかにも實際に即した觀法であり、首肯すべき見解であるが、おそらく范愛農の孤僻的性格がそのような現實と二重にからまつて、いよいよ彼を落魄不遇の境に追いこんだのであつたろう。それはいずれにもせよ、再會後の二人の交情は急速に親密の度を加えて行つた。その懇ろな交友關係は翌々年(一九一二)范愛農が水に落ちて原因不明の死をとげるまで続けられたが、それについては後述に譲ることにする。

ついで、一九一一年(三十一歳)、魯迅は暑中休暇中に紹興中学堂を辞任した。²⁰⁾この辞任の理由等についてもやはり不明のままであるが、僅かにこれに触れたものとしては、その当時紹興にあつて魯迅と交渉のあつた金如鑑(後述参照)が『又是時局面混亂，觀視中校地位而逐鹿者甚多，先生見景象日非，乃勸子英先生一同解職。』(「回憶魯迅先生」——「文芸月報」一九五六年十月号)と述べているのが参照される。つまり、やがて来るべき革命をひかえての時局の混亂が学内にも波及し、とかくの紛糾があり、ために校長陳子英とともに辞職した、というのである。これはおそらく前述の浙江兩級師範學堂辭任の背景とも連らなるであろうと推察される。なお「自叙伝略」によれば、紹興中学堂の教務長となつて以後『第三年又走出，沒有地方可去，想在一個書店去做編訳員，到底被拒絕了。』とみえるが、この書店編訳員云々のことは以下に続く文脈からすれば、紹興中学堂辭任後、同年九月(陰)紹興師範學校長に就任するまでの期間中のことであることが知られる。²¹⁾しかし、この書店編訳員云々についてはこれを具体的に例

証すべきものはない。ただ『没有地方可去、』と記されていることで、紹興中学堂辞任にはおそらく他律的な理由が介在したのではないかという推測の密度をいさか加重するように思われるのである。

やがて、清末以来の革命の機運いよいよ熟し、ついにこの年の十月十日(陰・八・十九)武昌に革命軍が蜂起し、ついで中、南部の諸省もこれに応じ、その勢いは全国を席捲するに至った。この革命の勃発を魯迅がいかに胸弾ませて迎えたかは想像に難くない。彼の在来(こころな)の経営のすべてがこの革命ひとすじに連らなるとも言いうるからである。紹興光復に際会した魯迅の能動的な姿態を喬峯は次のように伝えている。すなわち、杭州光復の報が紹興に伝わるや、その慶祝大会が開かれ、魯迅はその主席に推挙された。かくて彼は武裝演説隊を組織して人心の動搖を鎮め、革命の宣伝につとめるかたわら、王金発の革命軍を歓呼して迎えた。紹興に入城した王金発ははじめ広く世論を聞く趣旨から群集大会を開催し、また古い友人を招いて職務を委嘱した。魯迅が紹興師範学校校長を委嘱され、就任したのはこの時であつた(「魯迅任紹興師範学校校長の一年」——「略講關於魯迅的事情」)。なお、この時、校長魯迅のもとに范愛農は学監に就任した。²²⁾

さて、この紹興光復も、結局は極めて表面的な変貌にとどまり、その内実はやはり旧態依然たるものでしかなかった。魯迅はその間の消息を次のように述べている。『民元革命時候、我在S城、来了一个都督。他虽然也出身绿林大学、……但倒是还算顾大局、聽輿論的、可是自紳士以至于庶民、又用了祖传的捧法羣起而捧之了。這個捧会、那個恭維、今天送衣料、明天送翅席、捧得他連自己也忘其所以、結果是漸漸變成老官僚一樣、動手刮地皮。』(「這個与那個」——「華蓋集」)²³⁾

すなわち、王金発の軍政府もやがていくばくもなくして官僚化し、人民を搾取するようになったというのであるが、これは単に紹興という一局地にとどまらず、ひろく辛亥革命そのものに内包する反動、不徹

底性に対する抉剔ともうけとれよう。ともあれ、当時魯迅がその発起人の一人に名を列ねた「越鐸日報」の発刊はそのような反動化を監視し、筆伐するためのものであつた。この「越鐸日報」に關して、金如鑑は次のような事実を伝えている。『時、人王金発率少数部隊来紹、自称都督、飛揚跋扈、更任用三王(王介卿等)專政、横行不法、先生乃与予及孫德卿・王鐸中・趙漢卿君等十人发起、量力出資創弁「越鐸日報」、仮城区大善寺為臨時館址、旨在警告当局為民請命、在報上時加筆伐。』(「回憶魯迅先生」——「文芸月報」一九五六年十月号)

これに拠れば、金如鑑は当時紹興にあつて魯迅とともに発起人の一人となつた人であり、その記述には信憑性が強いわけであるが、われわれはそれを通して、「越鐸日報」の発起人は魯迅、金如鑑、孫德卿、王鐸中、趙漢卿その他十人であること、臨時の報館は紹興城内の大善寺に置かれたこと及び魯迅がその発刊詞を書いたこと等々を知りうるわけである。²⁴⁾

つぎに、この年の冬、魯迅は最初の試作小説「懷旧」を書きあげている(「年譜」)。「懷旧」は辛亥革命前夜のある一つの風景を描いた作品であり、その筋は、老塾師(禿先生)と隣家の吝嗇な富豪(金耀宗)及び老門番(王翁)と老婢(李嫗)等はたまたま暴動が発生し、革命党が城内に侵入するという報にそれぞれの反応を示すが、やがてそれが謠言であつたことがわかり、そのことからかつての長毛(長髮賊)の恐怖の想い出を語り合う、というのである。そのような筋が私塾と庭前の樹蔭を舞台にある年少の塾生の眼を通して綴られた好短篇であるといえる。この作品が文字通り試作であることは、周遐寿(作人)が、はじめ魯迅が書いて題名もつけずに書いたのを「懷旧」と命名し、「小説月報」に掲載したと述べている(「金耀宗」——「魯迅小説裏の人物」)ことから察せられる。しかし、試作とはいえ、そこにはおのずから魯迅の小説の特質があらわれている。そのことに關して

はすでに周遐寿も老塾師の『庸俗惡劣』性を指摘し、その『深刻的嘲罵郷原、与後来的小説同一氣脈、』と述べている（『禿先生是誰』——「魯迅の故家」）が、確かに事件の背後に閃めく魯迅の鋭い諷刺的な眼光がうかがわれる。そのような内容的連関とともに看過しえないのは、その文体である。「懐旧」の文体はすべて文言体である。これはおそらくそれ以前の翻譯「域外小説集」（文言体）とそれ以後の「狂人日記」（一種の文・白合成体）から「孔乙己」（白話体）以下に推移する文体の一つの橋梁であり、同時に、魯迅の白話文学運動に対する反応（後述）を理解する上での道標ともみられるものであろう。なお、この小説の素材、たとえば太平天国の故事などはおそらく彼が幼少のころ家人から聞いた話に基づくのであろうし、またそれが後の「阿長与山海經」（『朝華夕拾』）等にもまで継承されていることも一応注目すべきであらう。

（二）官吏生活——古書の校勘・輯佚工作

ついで、一九一二年（民国元年・三十二歳）、一月一日（陽曆、以下すべて同じ）に中華民國臨時政府が南京に成立、孫文が推されて臨時大總統に就任した。その後、外国列強の要請及び紛争回避の妥協策として孫文はその地位を袁世凱に譲らざるをえなかつた等々いくつもの迂余曲折はあるにもせよ、ともかくも清朝絶対制の倒壊、民国共和制の誕生というこの未曾有の变革は、中国にまつわる古きものを清算して新しきものへ向う記念すべき新生の契機であつた。魯迅がこの機運に際会し、その前途に期待したことは、たとえば彼が景宋にあてた書信に『説起民元的事来、那時確是光明得多、當時我也在南京教育部、覺得中国将来很有希望。』（『兩地書』）と述べていることによつてもその一端が窺えるであらう。『年譜』には『一月一日、臨時政府

成立于南京、膺教育總長蔡元培之招、任教育部部員。』とみえる。つまり、臨時政府の成立とともに教育總長蔡元培の招聘に應じ、教育部部員となつたわけであるが、まずここで紹興師範学校校長辭任について語らなければなるまい。その経緯については、魯迅自身「范愛農」（『朝華夕拾』）の中で次のように述べている。すなわち、紹興師範学校の校費は都督王金堯から支給されていたが、たまたま「越鐸日報」の軍政府攻撃が数日続いた後、王金堯から送附された五百円を魯迅に無断で新聞社はこれを資金として受領した。その後、魯迅等が都督の金銭を詐取したという情報の流れ、かくして今後は校費の請求にも応じないという通告があり、ついで魯迅は都督府へ赴いて辭表を呈出、その後任者は孔教会会長傅力臣であつた、というのである。つまり、「越鐸日報」を介して都督王金堯と校長魯迅との間に生じた紛糾が、辭任の理由であると解される。折からそのような時期に魯迅は許寿裳を介しての招聘に應じ、南京へ出て教育部部員となつたのであるが、それについて許寿裳は次のように伝えている。『中華民國元年一月一日臨時政府成立、定都南京、蔡子民先生任教育總長。：我被蔡先生邀至南京幫忙、草擬各種規章、日不暇給、乘間向蔡先生推薦魯迅。蔡說：「我久慕其名、正擬馳函延請、現在就託先生：代函敦勸、早日来京。」我即連写兩封信給魯迅、說蔡先生殷勤延攬之意。魯迅在朝華夕拾：范愛農有說云：然而事情很湊巧、季葦写信来催我往南京了。愛農也很贊成、但頗淒涼、說：——「這裏又是那樣、住不得。你快去罷。」我懂得他無聲的話、決計往南京。』不久、魯迅来京了。』（『入京和北上』——「亡友魯迅印象記」）

すなわち、これに抛れば、臨時政府が南京に成立するや、蔡元培（子民）は教育總長に就任、すでに招聘されていた許寿裳の推薦を通して魯迅は范愛農と別れ、南京へ出て教育部部員に任じたわけである。蔡元培は魯迅の同郷の先輩であり、以後魯迅と密接な関連のもとに

中国新文化の建設に不朽の名をとどめた人であるが、この蔡元培と魯迅の出会いが民国誕生のこの年であることは意義が深い。許寿裳は、さらに続けて、魯迅が暇をみては図書館を訪ね、「沈下賢集」を借りて抄写したが、後に「唐宋传奇集」に収録した「湘中怨辞」「異夢録」「秦夢記」などこの時の抄写であることを明かしている（「同」）。創作、雑感、翻訳と並んで魯迅の工作の重要な比重を占める古書の校勘輯佚工作がすでに着々と行われていたわけであるが、これに類するものとしては「古小説鈎沈」がこの年の二月にほぼ完成したとみられる。これについては許寿裳の「年譜」にはなく、また周作人もこれが完成にふれてはいるが、その正確な年月は記していない。ただし、雪草の「魯迅先生年譜」（「魯迅散論」）には「二月、「古小説鈎沈」輯録大体完成・作序。」と見え、また唐弢の「魯迅全集補遺編後記」（「向魯迅學習」）にも、「古小説鈎沈序」が民国元年（一九一二年）二月の「越社叢刊」第一集に発表されていること及びその編纂の時期はそれ以前であろうがその発表年月に従つて一九一二年とする旨が述べてあるもので、いま姑らくこれに従ふことにする。ともあれ、これら古小説逸文の蒐集は以後の「中国小説史略」のための準備工作ともなるわけである。

この頃、魯迅は許寿裳と同道して満清駐防旗營の廢趾を訪れた。それについては彼自身『南京是革命政府所在地、当然格外文明。但我去一看先前的滿人的駐在処、卻是一片瓦礫、只有方孝儒血跡石的亭子總算還在。這裏本是明的故宮、我做學生時騎馬經過、曾被頑童罵詈和投石、——猶言你們不配這樣、聽說向來是如此的。現在卻面目全非了、居民寥寥、即使偶有幾間破屋、也無門窗、若有門、則是爛洋鉄做的。總之、是毫無一点木料。』（「雜憶」——「墳」）と述べている。すなわち、革命の戦火を経ていまは一片の瓦礫と化し去つた慘憺たる旗營の廢趾

を目撃し、かつて鉱路学堂³²⁾在学中騎馬で通過した折に罵倒され、投石されたことを回想した、というのである。許寿裳もまた同様のことを述べ、魯迅は『言下猶有余恨。』（「入京和北上」）——「亡友魯迅印象記」³³⁾と結んでいるのであるが、それは、かつての罵倒、投石の印象が魯迅にとつて痛烈であつたことを物語るとともにおそらくは革命というものの現実的なきびしさ、その有為転変の相にひとしおの感慨に打たれたことを示すものであらう。

さて、南京の臨時政府を北京に遷することを参議院が議決したのはこの年（一九一二年）の四月五日であるが、「年譜」にも『民国元年：五月航海抵北京。』とみえるように、魯迅は政府の遷都に従つて北京へ移つた。尤も、四月中に魯迅は許寿裳とともに紹興に帰り、五月初旬とともに北京へ発つたのであるが（「入京和北上」）、「魯迅日記」³⁴⁾によれば、五月五日に北京に到着、その夜は山会邑館（紹興県館の旧名）に許銘伯（許寿裳の兄）を訪ね、「越中先賢祠目」一冊を見た、とみえる。これを「年譜」によつて補えば、魯迅は宣武門外南半截胡同の紹興県館内の藤花館に居住し（六日）、社会教育司第一科科长に任じたのである。その職掌は図書館、博物館、美術館等を主管するものであつた（許寿裳「提倡美術」——「亡友魯迅印象記」）。魯迅がこの職に就いたのはもちろん蔡元培の要請によるのであるが、その経緯についてはやはり許寿裳の記述が参考される。いまそのあらましを述べれば、蔡元培は教育総長に就任以来、極力「美術を以て宗教に代える」ことを提倡し、政務多忙の中に「對於教育方鍼之意見」を発表した。この種の教育方針は当時これを理解する人が少なかつたが、魯迅はその原意を深く諒承し、蔡元培もまた魯迅が美学、美育（美感教育）に造詣の深いことを知つたので社会教育司第一科科长の就任を要請した（「同」）というのである。蔡元培が新政府の教育総長として、当時喧

伝された軍国主義、実利主義の反面に公民道徳を中核とし、そのための美育を提唱したことは、中国新文化の基底として重要であり、彼の文化、教育における指導原理として特筆さるべきであるが、彼がその協力者乃至は理解者として魯迅に期待したことは意味が深い。事実、魯迅のこの方面における造詣は、たとえば幼少年期における絵画への愛着などにその萌芽がみられるが、さらに中年期における漢代画像の蒐集研究及び「近代美術史潮論」等の訳業あるいは晩年における版画の提唱など、魯迅自身の資質とともに蔡元培の徳愼が大いに影響していることも考えられるであろう。

魯迅はこの年の六月、教育部主催の夏期講演会で「美術略論」を講演している。³⁶⁾なお、この美育は教育部が召集した臨時教育会議によつて刪去されてしまうのであるが、魯迅はそれについて『聞臨時教育會議竟刪美育。此種豚犬、可憐可憐。』（『魯迅日記』七月十二日）と憤懣を洩らしている。

ついで七月十九日、魯迅は周作人が十二日に紹興から出した手紙によつて、范愛農が十日に水死したことを知つた（『魯迅日記』）。愛農急死の報に接した魯迅の心情は想像に難くないが、許寿裳はその時の魯迅の姿を次のようにとらえている。『有一天、大概是七月底罷、³⁷⁾大風雨凄凄之極、他張了傘走來、對我們說：「愛農死了。拋說是淹死的，但是我疑心他是自殺。」于是給我們看昨夜所作的哀詩三首。』（『懷旧——我所認識的魯迅』）

この『哀詩三首』は、「哀范君」と題し、黄棘という筆名で「民興日報」³⁸⁾八月二十一日号に發表されたが（周啓明「魯迅的青年時代」）たとえば、その終句に『故人雲散尽、我亦等輕塵』とみえ、さらに「范愛農」において「夜間坐在会館裏、十分悲涼、又疑心這消息並不確、但無端又覺得這是極其可靠的、雖然並無証拠。一点法子都没有……。」と

述べているところからも、魯迅の悲哀、動顛の並々でなかつたことが察せられよう。

ついで、八月二十二日（『魯迅日記』）に教育部倉事に任命された。³⁹⁾なお、この年彼は公務の余暇に謝承「後漢書」を纂輯しているが、（『年譜』）、これを手がけた理由の一つは、周作人も述べているように（『關於魯迅』）、謝承（偉平）は山陰の人であり、会稽の先賢であるところから、特にその纂輯に注目したのであらうと思われる。

魯迅が南京の教育部に着任早々公務の余暇に古小説の抄写にあたつたこと及びその頃「古小説鈞沈」がほぼ完成したことはすでに前述したが、この前後を通じて（わけても教育部在職期間中）、彼はいわゆる古書の輯佚という、一見極めて地味な工作に自らを没入させている。

これは在来の魯迅のありかたからすればむしろ異常とさえうけとれる。魯迅のあの維新変革への傾倒、そのひたむきな念願が、いまや清朝絶対制の崩壊、民国の誕生とともにようやく達成されつつあるかに見えるのに魯迅はその様な機運とはまるで逆に古書の中へ没入して行く、その理由は果して何であらうか。鄭振鐸は魯迅のこの種の輯佚工作の辛苦艱難と細心緻密さをあげた後、かつて魯迅が語つた言葉として『他曾經告訴我、當他在教育部弁事的時候（一九二一至一九二五）、每天幾乎無公可弁。許多同事們都在看報、下棋、談閒天。他的時間都耗費在翻訳和古書の校勘上。同事們反以他的這種努力為奇怪！這一大段的比較有「暇」的時間、便是他的許多古書輯佚的工作的時間。』と述べている。つまり、魯迅の教育部における職務が比較的に閑職であり、その余暇が古書の輯佚工作の時間にあてられたことを指摘しているわけである。このことは「年譜」にも『公余』と記されていることで察知されるのであるが、しかし、それはむしろ魯迅のこの種の工作を援ける便宜な条件にすぎないと思われる。鄭振鐸はさらににつづけて『原来「輯佚」的工作、往往是「文芸復興」的先驅。』とみて、

その意義の重要さを認めているのであるが、輯佚工作の基礎的意義はそのまま肯定しようとしても、魯迅をしてこの時期にこの工作に没入せしめた内面的な精神の所在を確める手掛りとしてはなお不充分と思われる。その点からすれば、この輯佚工作の精神背景は、かつて魯迅がその文学運動の第一歩として企画した雑誌「新生」の失敗から生じた寂寞と、やがて迎えた辛亥革命に対する失望との交錯の中に求められるのではなからうか。「新生」失敗後における寂寞を魯迅は次のように述べている。『這寂寞又一天一天的長大起来，如大毒蛇，纏住了我的靈魂了。然而我雖然自有無端的悲哀，卻也並不憤懣，因為這經驗使我反省，看見自己了：就是我決不是一個振臂一呼應者雲集的英雄。只是我自己的寂寞是不可不驅除的，因為這于我太痛苦。我于是用了種種法，來麻醉自己的靈魂，使我沈入于國民中，使我回到古代去，後來也親歷或旁觀過幾樣更寂寞更悲哀的事，都為我所不願追懷，甘心使他們和我的腦一同消滅在泥土裏的，但我的麻醉法卻也似乎已經奏了功，更沒有青年時候的慷慨激昂的意思了。』（『吶喊』序）

すなわち、これによれば、「新生」失敗の経験が魯迅を内面的反省、自己凝視へと向わせ、その寂寞を驅除するためにいろいろな方法で自己の精神を麻痺させ、ついに若い頃の慷慨激昂の氣持を失った、というのである。ここにみえる『國民の中への沈入』が彼の官吏生活を指すとするれば、『古代へ返る』というのは、つまり、古書の輯佚等一連の工作を意味するものと解されよう。魯迅のそのような内面的沈潜を救ったのが、折から來訪した錢玄同の作品発表の勧告であることは姑らく後述に譲るが、ともあれ、この輯佚工作は魯迅が寂寞にたえかねた精神を麻痺させる一つの方法として採り、それを続けて行く中にやがてそれに沈潜して行つたであらうことは、少くとも説明としてこの『吶喊』序から汲みとることができるであらう。

輯佚工作のそのような精神背景をさらに強めたものが、おそらくは

辛亥革命に対する彼の失望であつたろう。この革命のもつ限界性を魯迅は紹興という舞台をかりて前引の「范愛農」〔「朝華夕拾」〕の中で述べている。それは紹興という一局地を超えた普遍性を持つものと考えられるのであるが、ともかくも、辛亥革命の実体が旧態依然たる軍閥、官僚の横行、擾乱の連続であることはその後の歴史の示す通りであり、魯迅自身もそれについて『見過辛亥革命、見過二次革命、見過袁世凱稱帝、張勳復辟、看來看去，就看得懷疑起來，于是失望，頹唐得很了。』（『自選集自序』——『南腔北調集』）と述べている。魯迅の懷疑、失望は革命に対する期待が大きかつただけにそれだけ深かつたのであらう。以上のような寂寞、懷疑、失望の交錯が魯迅を古書の輯佚工作に沈潜せしめる精神背景であつたろうと思われるのである。

ついで、一九一三年（三十三歳）、この年の一月、彼の文言体の小説「懷旧」が「小説月報」（第四卷第一号）に周連という筆名で発表された。ついで三月二十七日、謝承「後漢書」の纂輯が成つたことは「魯迅日記」に『寫謝承後漢書畢共六卷約十萬字』と記されているのが参照される。なお、同書序が書かれたのは三、四月の間であらう。⁴²⁾ ついで六月に休暇をとり津浦線經由紹興に帰省し、八月に海路北京へもどり、十月、公務の余暇に「嵇康集」を校勘した（『年譜』）。この「嵇康集」校勘が各種の異本を校合し緻密細心な工作の上に成つたことはたとえば、その序文に、『今此校定，則排摺旧校，力存原文。其為濃墨所滅，不得已而從改本者，則曰字從旧校，以著可疑。云々……』とみえることによつても窺えるのであるが、なお、許壽裳もこれについて『自民二（一九一三）以後，我常常見魯迅伏案校書，單是一部「嵇康集」，不知道校過多少遍，參照諸本，不厭精詳，所以成為校勘最善之書。』（『整理古籍和古碑』——『亡友魯迅印象記』）と賞讃している。

この校勘は後に發表した「魏晉風度及文章与藥及酒之關係」（『而已

集」など卓抜な論文を生む基礎工作の一つとなるわけであるが、魯迅はひろく魏晋文学、わけても孔融・嵇康らに非常な愛着を示している。魯迅と魏晋文学との関連は彼がかつて傾倒した章太炎にまで遡りうるであろうが、その文体、文彩面における簡約・嚴明な特質は彼がこれまで発表した諸論文及び翻訳などに影響していることも当然に考えられよう。また、かつて劉半農が『托尼学説』⁴³⁾「魏晋文章」なる聯語を魯迅に贈つたところ、当時の友人はみなこの聯語の適切性を認め、魯迅自身もあえて反対しなかつたということが孫伏園の「魯迅先生二三事」⁴⁴⁾にみえる。これによつても魯迅と魏晋文学との密接な関係は窺われるのであるが、それは単に文章の面を超えてさらにひろく魏晋文学のありかた、その集約的現われとしての孔融、嵇康ら文学者の生きかた、その思想内容などに彼は一脈相通するものを感じ、共感を見出したのではなかつたかと思われる。漢末魏晋は魯迅も述べているように『文学の自覚時代』⁴⁵⁾「魏晋風度及文章与藥及酒之關係」であり、暗黒な時流の中によりやく自我に目覚め、旧礼教に反抗し、そのためにあえて奇矯な態度をとらざるをえず、而もなおその生命を保全しかねるような時代であり、そのような時代相と、旧礼教に反抗した文学者達、とくに非命に斃れた孔融（建安七子の一）、嵇康（竹林七賢の一、司馬懿に殺害さる）らに魯迅は現実には生きた自己との密接な交流を見出し、これに深い共感を感じたのではなかつたろうか。選択の基準をつねに自己との交流点におくこのしくみは、彼の外国文学摂取の態度にも明瞭に窺われるのであるが、さらに云うならば、このような彼の好みは、いわゆるオーソドックスな経書よりはむしろ子書を、正史よりはむしろ野史雜記をという、自国の古典に対する態度にも共通するものがあると思われるのである。⁴⁸⁾

なお、この年魯迅は「擬播布美術意見書」⁴⁹⁾を発表し、また「芸術概

賞之教育」⁵⁰⁾（日本・上野陽一原著）「社会教育与趣味」⁵¹⁾（同）、「児童之好奇心」⁵²⁾（同）を翻訳した。これらは魯迅が担当した教育、とくに美育の参考としてであること云うを俟たない。

（三） 仏経——古碑の抄写工作

ついで、一九一四年（三十四歳）、この年「年譜」には『是年公余研究仏経』の一条がみえるように、魯迅は盛んに仏教の經典を翻譯している。魯迅の仏教への関心がやはり章太炎に発すること及びその見解の相違点などについて許寿裳は『魯迅説仏経』、当然是受章先生の影響。先生在西獄、備受獄卒的陵暴。鄒容不堪其虐，因而病死。先生於做苦工之外，朝夕必研誦「瑜伽師地論」，悟到大乘法義，才能克服苦難，期滿出獄之後，鼓動革命的大業。先生和魯迅師弟二人，對於佛教的思想，歸結是不同的：先生主張以佛法救中国，魯迅則以戰鬥精神的新文芸救中国。』⁵³⁾「看仏経」——「亡友魯迅印象記」と述べている。章太炎、鄒容が租界の牢獄につながれた経緯についてはすでに別稿において述べたが、⁵⁴⁾許寿裳はさらに、『釈迦牟尼真是大哲，我平常對人生有許多難以解決的問題，而他居然大部分早已明白啓示了，真是大哲！』あるいは「仏教和礼教一樣，都已經死亡，永不会復活了。」という魯迅の述懐の言葉をあげ、魯迅は、要するに、仏経を人類の思想發達の史料として眺め、人生觀の研究に資しただけであると結んでいる（「同」）。許寿裳のこの見解に対してはおそらく異論を挿む余地もないのであるが、ただ魯迅の仏経への関心の背景にはやはり魏晋文学との関連が見落されてはならないであろう。その意味において周啓明（作人）の述べる『他由此引伸又多説仏経，本来并無宗教信仰，只是去当作古書来看，因為中国自後漢起便翻訳仏経，到六朝為止訳出了不

少、所以当作六朝文来読、也是很有興趣的事情。』(『魯迅与中学知識』——「魯迅的青年時代」といふ見解にはさすがに傾聴すべきものがある。ともあれ、すでに亡び去つたものとしての仏經を翻とく魯迅のすがたは、古書の校勘輯佚等の工作に没頭するのと同様に、當時の彼の内面的な沈潜の一つの現われとして理解されるであらう。

なお、ここで前引の許寿裳の文(『看仏經』——「亡友魯迅印象記」)にみえる『大乘法義』に関連して思い合はされるのは増田涉氏の論述である。増田氏は『……一体に魯迅をも含めて、中国の近代の思想的な指導者と見られる人々は、己れを救うということより、他人を救うということを先きにした。或は他人を救はうとすることの中に、己れを救うの途を見出した。』と述べ、これを大乘仏教の精神と結びつけ、梁啓超をはじめとする中国近代啓蒙思想家に普遍するものとみ、さらに中国には小乗が受け入れられず、大乘が栄えたという仏教史的事実の中から或いは中国人の一般的な精神基盤が考えられはしないか、と述べておられる(『魯迅の印象』)。増田氏のこの論はもちろん暗示的な問題提出の域を超えていないわけであるが、そこには多分に示唆的なものが含まれているように思う。魯迅の生涯にみられる、あの痛ましくも美しい自己犠牲の精神を支えたものは果して何であつたか。それが直ちに大乘の精神の反映であるか否かをいうことは必ずしも容易ではない。たとえば、いまかりに中国の古典にみえる『殺身以成仁』(『衛靈公篇』——「論語」といふ一句をとつて魯迅の生涯に照合した場合、われわれはその実践的な顯現を汲みとることができるであらう。ともあれ、その晩年、過ぎ来し幾春秋をかえりみて、妻許広平に対して『我好像一隻牛、喫的是草、擠出的是牛奶・血。』(許広平「獻詞」——「欣慰的紀念」)と語つたといふ彼の言葉、或いは死の数カ月前(五月三十一日)、病床を見舞ひ、療養をすすめた許寿裳に対して『我從前總是爲人多、爲己少、此後要想專心休養。』(許寿裳「病死」

——「亡友魯迅印象記」と語つたといふ彼の述懐はいずれもこの自己犠牲の感慨深い表現であることを指摘するにとどめよう。

この頃、魯迅が許寿裳と話し合つて購入した仏教關係の書には「瑜伽師地論」「翻訳名義集」「闍藏知津」「看仏經」——「亡友魯迅印象記」、その他多数があり、「甲寅書帳」(『魯迅日記』)と参照される。

なお、この年、「芸文雜誌」及び「百草書屋割記」を夫々周予才、巴人の名で「越鐸日報」副刊に發表した。

この年(一九一四)の時代背景をみれば、七月に第一次歐洲大戰の勃発があり、十一月には日本軍の青島占領があり、内外ともに物情頗る騒然たるものがあつたわけであるが、魯迅はひたすらに仏經を翻とぎ、或いは「百喻經」の識語を記す(九月、後述)などしているのであり、そのいわば逆説的な姿態の中にやはり彼の沈潜の深さのほどが窺えるであらう。

ついで、一九一五年(三十五歳)、この年も、『一月輯成会稽郡故書雜集一冊、用二弟作人名印行。同月刻百喻經成。是年公余喜蒐集並研究金石拓本。』(『年譜』)とみえるように依然として古書の裡に没頭している。「会稽郡故書雜集」の輯成は前引の「年譜」によれば一月であるが、いま唐毅の「魯迅全集補遺統篇」に従つてこれを一応二月と訂正する。⁵⁸⁾この書は、彼の郷土のいまや泯滅に瀕しつつある歴史地理關係文献を蒐集校定し、その風土の美或いは先賢を偲ぶよすがとしてこれを後世に保存しようとの意図によるのであるが、それについては『幼時嘗見武威張澍所輯書、於涼土之文獻、撰集甚衆、篤恭鄉里、尚此之謂。而會稽故籍零落至今、未聞後賢爲之綱紀。乃叔就所見書伝、刺取遺篇、索爲一裘。』(同書「序」)と述べ、また『書中賢俊之名、言行之迹、風土之美、多有方志所遺。舍此更不可見。用遺邦人、庶幾供其景行、不忘於故。』(同)と記されているところからも察せら

れる。因みにこの書は序文に『会稽周作人記』と署名しており、弟周作人の名義で刊行されたのであるが、周作人は一切の編排考訂等すべて魯迅の手になつたことを明かしており（『關於魯迅』）、つづけて『到了付刊時却不願出名，說寫你的名字吧，這樣便照弁了，一直拖了二十余年。現在覺得應該說明了，因為這一件小事我以為很有點意義。這就是證明他做事全不為名譽，只是由於自己的愛好。這是求學問弄藝術的最高的態度，認得魯迅的人平常所不大能够知道的。』（『同』）と述べている。つまり、魯迅がこの書を周作人の名義にしたのは、彼の仕事すべて名譽のためではなく、専ら自分の愛好に由ることを証明する、というのであるが、これはやはり一応の説明でしかないように思われる。許寿裳はこのことについて、『輯成会稽郡故書雜集一冊，用二弟作人名印行』と『年譜』を引用し、その理由として『為的自己不求聞達，即此可知魯迅之如何以名讓！名和利都可以讓給兄弟，我們就容易明瞭那「弟兄」裏的一句贊歎沛君的話：「真是少有的，他們兩個人就像一個人。』（『關於兄弟』）』「我所認識的魯迅』と述べている。つまり、魯迅自身は聞達を求めず、名と利とを弟周作人に譲与した、というのである。これもまた一応の説明でしかないようであるが、むしろ、ここにこそ魯迅の、前述のような自己犠牲、と云つて強きに失するならば没我的な精神の所在をみる一つの手掛りがあるのではなからうか。と同時に、長兄としての魯迅の、弟周作人に対するいたわるような愛情のかげを窺うことができるように思われる。官吏として一応の生活の安定をえている魯迅が経済的な援助とともに弟周作人を誘掖、庇護しようという気持の現われをわれわれはここに汲みとることができるであらう。⁵⁰⁾

なお、資金の關係で刊行されなかつたが、『古小説鈞沈』の場合も同様であることは、やはり周作人が『其所輯錄的古小說逸文也已完成定名為「古小説鈞沈」，当初也想用我的名字刊行，可是沒有刻板的資財，

託書店出版也不成功，至今還是擱着。』（『關於魯迅』）と述べていることで明らかである。

つぎに「百喻經」の刻成であるが「魯迅日記」を参照すれば、それが成つたのは一月十一日である。その識語には『会稽の周樹人洋銀六十元を施し、敬んで此經を刻す。圈ともに字数二萬一千零八十一字、功德書一百本を印送し、資余六元を以て地藏十輪經を刻す。民國三年秋九月、金陵刻經処識。』とみえる。これは抛れば、魯迅はこの書を翻刻し、功德書として頒布したわけであるが、この「百喻經」をとくに撰択した理由については、彼自身『仏藏中經，譬喻為名者，亦可五六種，惟百喻經最有条貫。其書具名百句譬喻經。』（『癡華鬘』題記）「集外集」と述べている条が参照されよう。すなわち、魯迅が愛好し、また非常に屢々彼の文学に採用されている譬喻が、この翻刻と密接に関連することが察せられるのである。

つぎに、公務の余暇に蒐集研究した金石拓本（前引「年譜」）について、胡冰はこの年の四月以降に魯迅が碑志拓本を大量に購入している事実を「魯迅日記」を通して確めており（『魯迅対石刻画像的搜集与研究』——「魯迅研究札記」⁵¹⁾、また、許寿裳は『至于魯迅整理古碑，不但注意其文字，而且研究其图案。』（『整理古籍和古碑』）「亡友魯迅印象記」と述べ、「南齊呂超墓志跋」を例にあげてその緻密さを称賛しているが、なおこの金石拓本については以下に補記する。

さて、この年（一九一五）の時代背景の主な事件をあげれば、一月に日本の対支二十一カ条の要求があり、ついで五月に最後通牒の提出があつた。かくて袁世凱はついにこれを承認、中日条約の成立をみるに至つたが、ここに承認反対の民衆運動が勃発、留日学生の「一斉帰国」にまで展開した。これに関連して思い合はされるのは郭沫若である。当時留日学生の一人であつた郭沫若は『哀的美頓書』^{アルタイイタム}已西、衝冠有

怒与天齊。問誰牧馬侵長塞，我欲屠蛟上大堤。此日九天成醉夢，當頭一棒破癡迷。男兒投筆尋常事，婦作沙場一片泥。』（『創造十年』）といかにも憂國の至情溢れる詩を詠じて率先帰国したのであつた。郭沫若は後に創造社の盟主として、魯迅の「語絲」派と論戰をたたかわすなど、それぞれ中国新文学の両極にあつて対立、反撥の關係に立つのであるが、この兩人のこの時期における相互対照はいかにも興味深いものが感じられよう。

さて、その後、袁世凱は帝制のための準備を着々と強行、ついで雲南に反袁軍が蜂起するなど国内の情勢また緊迫の度を加えて行くのであるが、魯迅はしかし、少くとも表面的にはそれらのあわただしい風潮とは一応断絶したかのように、相も変らず古碑の抄写など、その沈潜の度をますます深めて行くようにみえるのである。

ついで、一九一六年（三十六歳）、「年譜」には『五月、移居会馆補樹書屋。十二月、請仮由津浦路歸省。是年仍蒐集研究造象及墓志拓本。』とみえる。五月に移つた補樹書屋というのは、魯迅がみづから『S会館有三間屋、相伝是往昔曾在院子裏の槐樹上縊死過一個女人的、現在槐樹已經高不可攀了、而這屋還沒有人住、許多年、我便在這屋裏鈔古碑。』（『吶喊」序）と述べている処であり、『魯迅日記』を参照すれば、ここへ移つたのは五月六日であり、『下午以避喧移入補樹書屋住』とみえる。ともあれ、かつて女人が縊死し、その後住む人もないままのこの書屋に移り住んでひたすら古碑の抄写などに没頭している魯迅の姿はまさに沈潜の極みというほかはない。これは勿論前述の古書の校勘輯佚工作からの連続であるが、このように魯迅の沈潜の度合いをますます深からしめたものは果して何であつたろうか。周遐寿（作人）はそれを次のように述べている。『洪憲帝制活動時、袁世凱的特務如陸建章の軍警執法處大概繼承的是東廠の系統、也着実可怕、由它抓去失踪的人至今無可計算。北京文官大小一律受到注意、生恐他們反对或表示不服、以此人人設法逃避耳目、大約只要有一種嗜好、重

的嫖賭蓄妾，輕則玩古董書画，也就多小可以放心。：教育部裏魯迅的一班朋友如許壽裳等如何弁法，我是不得而知，但他們打馬將總是在行的，那麼即此也已可以及格了，魯迅却連大潮（亦称挖花）都不会，只好仮装玩玩古董，又買不起金石品，便限於紙片，收集些石刻搨本来看。单拿搨本来看，也不能敷衍漫長的歲月，又不能有這些錢去每天買一張，於是動手来抄，這樣一塊漢碑的文字有時候可供半個月的抄写，這是很合算的事。因為這与謄清草稿不同，原本碑大字多，特別漢碑文又多断缺漫漶，拓本上一個字若有若無，要左右遠近的細看，才能称微弁別出来，用以消遣時光，是再好也没有的，就只是破費心思也很不少罷了。（『抄碑的目的』「魯迅的故家」）

これに拠れば、袁世凱の帝制運動に當つて特務（秘密警察）がその反对或いは不服者を摘発するために監視しており、北京の文官はこれを免れるために種々の手段を講ぜざるをえなかつたが、魯迅の抄碑はそのために択んだまたとない恰好の工作であつた、というのである。周遐寿のこの見解はいかにも實際に即した観法であり、魯迅が抄碑を手がけた動機の中にはおそらくそのような事情が大きく作用していたものと首肯される。しかし、その工作が単にそれだけのものにしか過ぎないとは考えられないのであるが、これについて周遐寿はさらにつづけて『他的抄碑的起因既然如此，那麼照理在袁世凱死後，即是從民國五年下半年起可以停止不再抄了，可是他還是繼續抄下去，在民國九年給新青年写稿之前，他所忙着写的差不多就是碑文或是碑目。這是什麼緣故呢？』と反問し、その理由を次のように説明している。『因為他最初抄碑雖是別有目的，但是抄下去也發生了一種校勘的興趣，這興趣便持續了好幾年，後來才被創作和批評的興趣替代了去。』（『抄碑的方法』）

つまり、魯迅は抄碑工作を続けて行く中に校勘そのものに興味を覚えるようになり、それが幾年も続いた後始めて創作と批評の興味がこれに代つた、⁶⁰⁾というのである。この見解に対してはおそらく異論を挿

む余地はないのであるが、ただ周遐寿は当時の魯迅の内面的な精神の所在を等閑視している嫌いがあるように見受けられる。おそらくは、すでに前述したように、当時の魯迅が感得していた寂寞、懷疑、失望等々の精神の所在がたまたま袁世凱の帝制運動にあたり特務の監視から逃れる必要から着手したこの抄碑工作与ゆくりなくも巧合し、それに没頭して行く中に校勘そのものに興味を覚えるようになり、かくて袁世凱の死後においてもなおそれが続行されて行つたものと解されよう。

魯迅のこの抄碑工作进行をさらに詳細に論述したものとしては、おそらく胡冰に指が屈せられるであろう。彼はまず魯迅の少年期における金石文字に対する愛好がこの石刻画像の挿集研究の基礎になつていふことを述べ、ついで、より深刻な原因として、辛亥革命に対する失望の出路として中国の歴史的、伝統的文化への研究に向つたことをとりあげ、また、とくに一九一五年前後は袁世凱の特務に対応して悲憤と寂寞感の裡にこれらの工作に没頭した旨を述べている。ついで胡冰はその學術的意義からみて、この石刻画像の研究は、(一)彼の芸術への愛好と民族文化遺産に対する重視に基礎があること、(二)中国文字の変遷を考究するためであつたこと、(三)中国文学史編纂の補助的材料であつたこと、を指摘し、(四)及び(五)に就いては、許広平が胡冰に寄せた書信の一節、すなわち『他(指魯迅—冰)之所以研究石刻画像、從那里、一方面可以研究中国字体史、另一方面、可以作為写中国文学史的風俗習慣的正確了解的一面。』(一九五一年十一月六日函)をあげて傍証としている(「魯迅対石刻画像の挿集与研究」——「魯迅研究札記」)。

われわれは以上の周遐寿及び胡冰の所論を通して、魯迅のこの抄碑工作に含まれる各種の意義をそれぞれに首肯しうるわけであるが、いまここで、さらにこれを補足するとすれば、或いは胡冰のあげた(一)の民族文化遺産に対する重視と多少重複する点もあるが、当時魯迅が教育

部部員として美術関係を担当していた背景をも併せ考えなければならぬように思う。たとえば、前掲の「擬播布美術意見書」の中の「保存事業」の項をみれば、『碑碣——推拓既多。日就漫漶。当令禁止。俾得長存。』とあり、また、『壁画及造象——梵刹及神祠中有之。間或出於名手。近時仮破除迷信為名。任意毀壞。当考鑒作手。指定保存。』とあるように、それらを美術品として保存すべき必要性を痛感していたわけであるが、そのような魯迅が担当していた実際の職責との関連も看過されてはならないであろう。

さて、以上のような状態の中で、魯迅は相変らず郷里紹興の二弟、三弟に手紙を書き、友人と往来し、また頻繁に留瑞廠を訪れては書籍拓本を購入する等々の生活をつづけていたのであるが、前引の「年譜」にみえる帰省を「魯迅日記」に参照すれば、十二月三日に北京を発ち、七日に紹興に着いている。また、造象及び墓志拓本の蒐集研究などについてはこの年の「書帳」(「魯迅日記」)にその関係のものが多数を占めていることが併せ参照される。

なお、ここで補足すべきは、この年の正月に「蜨龕印存序」(唐弢編「魯迅全集補遺統篇」)を書いていることである。これは山陰の杜沢卿の作で、はじめ周作人が書いた原稿を魯迅が改定し、翌一九一七年「姦社叢刊」(第四期)に啓明という名で発表した、とみえる。⁶⁵⁾

つぎに、記述は多少前後するが、ここで魯迅の従兄弟の阮久孫の来訪について附記しよう。この人は「狂人日記」(「呐喊」)の素朴なモデルになつた人物で、もともと山西省で幕友の職にあつたが被害妄想狂となり、北京へ出て旅館を転々としていたが、十月三十日突然に来訪し、また「絶命書」⁶⁶⁾を郷里の家に届けて呉れるよう依頼した。魯迅はとりあえず彼を紹興館内にとめたが、翌三十一日病状が悪化したので池田医師の来診を請い、その夜入院させた。十一月に入り魯迅は連

日池田医院に久孫を見舞っているが、六日に退院の手続きをすませ、人をつけて彼を郷里に送り帰した。小説「狂人日記」はもちろんこの阮久孫なる人物のリアルな描写ではないが、この被害妄想狂の奇怪な言動をつぶさに見聞した経験が作品背景に大きく影響していることは当然に推測されるであろう。

(四) 張勳の復辟——文学革命——錢元同の勧告

ついで、一九一七年（三十七歳）、「年譜」には『一月初返北京。』とみえるが、「魯迅日記」を参照すれば、一月三日に紹興を発ち、七日に北京に着いている。さらに『七月初、張勳復辟乱作、憤而離職、同月乱平即返部。』（「年譜」とみえる。張勳が溥儀（宣統帝）を擁して復辟（清朝復活）を策したのは七月一日のこと、この事態に際し、段祺瑞の張勳討伐宣言等を介して北京は一時紛擾した。「魯迅日記」を参照すれば、たまたま二弟周作人が上京中であつたが、魯迅の身辺にもかなりの動揺のあつたことが知られる。すなわち、七月七日に飛行機を見、齊寿山からの電話で周作人とともに東城船板胡同の新華旅館に避難し、九日には電報で郷里に無事を知らせ、同日夜には銃声を聞き、十二日には戦声甚だ烈しく、謠言が乱れ飛んだとみえる（「魯迅日記」）。周遐寿（作人）が『民国六年七月一日張勳復辟、不久討逆軍進逼京城、城裏の人紛紛避難：』（「補樹書屋旧事」）「魯迅的故家」と述べているのは当時北京にいて魯迅とともに避難した折の記録であるわけである。ついで魯迅が紹興会馆に帰つたのは十四日であり、翌々十六日には教育部に赴いている（「魯迅日記」）ので、この復辟事件もおよそ二週間余で鎮定したことが知られる。この事件は前引の「自選集自序」にも説かれているように、魯迅の革命に対する懷疑、

失望を深める素材の一つとなつたものであり、彼がこれに異常な憤懣を感じたことは当然であるが、そのための『離職』（「年譜」）というのはおそらく辭職の意味ではなく、職場を離れたという程の意味であり、前述の新華旅館への避難等を指すものと解される。ともあれ、この事件も二週間余で鎮定し、以後は従前通りの生活が続けられるのである。なお『是年仍蒐集研究拓本。』（「年譜」とみえるように、魯迅は相も変わらず拓本の蒐集研究に没頭しているのであるが、このことはやはり「書帳」（「魯迅日記」）等が併せ参照される。

さて、そのような沈潜をつづける魯迅の足もとから中国文学史上に劃期的な意義をもついわけゆる文学革命運動が勃発した。いま、そのあらましを述べると、この年の一月、雑誌「新青年」（第二巻第五号）に、当時アメリカのコロンビア大学に留学していた胡適が投稿した「文学改良芻議」という一文が掲載された。これはいわゆる『八不主義』を中心に、すでに死語となつた非実用的な文言（文語）を廃して、活語である白話（口語）を用うべきことを説いたものである。胡適によつて提案されたこの問題は、さらに陳独秀によつて大々的に取り上げられ、翌月の「新青年」にいわゆる『三大主義』を基本とする「文学革命論」が発表された。胡適の提唱する表現形式の変革は陳独秀の主張する内容上の革命と相俟つて、ここに文学革命の旗は正式に打ち立てられた。この文学革命は中国の文芸復興といわれるように、新文学は勿論広く新文化運動の発端としての意義をもつのであるが、しかし、魯迅がこの運動の発足にあつて少くとも積極的にこれを支持したという証拠はない。事實は、むしろその逆であるかにさえみえる。これについては魯迅自身が『然而我那時对于「文学革命」、其実並沒有怎樣的熱情。』（「自選集自序」）と述べていることでそれは判るのであるが、この劃期的な文学革命

に対して、魯迅がまるで熱情をもたなかつたというのは何故であろうか。これについてはすでに前にも引用したが、この引用文に続いて述べてあるように辛亥革命及びそれ以降の革命の実体に対して魯迅が感得した懷疑、失望が決して並々でなかつたからであろう。魯迅の従来経営のすべてはこの革命一つを迎えるための工作につらなると云うこともできるであろう。それにかけた期待が大きかつただけに現実に裏切られた傷痕の深さが思い察せられる。そのような中であげられた文学革命の叫びに彼が率爾として銜を返さず氣になれなかつたことは想像に難くない。

と同時に、ここでこの文学革命運動それ自体の性格を分析してみることにも必要であろう。

文学革命をいま便宜的に思想革命と文字革命に分けてみれば、思想革命は「新青年」の掲げた徳莫克拉西 (Democracy) 及び賽因斯 (Science) に帰納されるが、魯迅が終生そのためにたたかつた封建制の打破あるいは科学の提唱等を考えれば、この面で魯迅が共感であつたことは当然であり、また以後「新青年」に発表した一連の小説、随感等を通してそれは明白である。とすれば、比重はむしろ文字革命の面にあると察せられよう。胡適の唱える『八不主義』を検討すれば、その内容、実質の改革にまで及んだものとしてはせいぜい三カ条だけであり、その他は率ね形式上のことにしかすぎない。しかも、胡適のそれはいうならば提案以上に出でず、これがあの文学革命の導火線となつたというのは、むしろ時流に投じたかの感が深い。胡適がしよせんは提案者以上に出ないことはその後のありかたがこれを傍証する。さらに、胡適の白話提唱は在来の文言の權威に代えるに白話を以てしたかの感すら否定しえない。魯迅が問題にするのは、胡適流のそれではなくて、むしろ白話の発想、その精神であろう。たとえば、彼が『但我還有一個意見、以為学 Esecranto 是一件事・学 Espano 的

精神、又是一件事。——白話文学也是如此。』(『渡河与引路』「集外集」)と述べていることでその一端が理解されよう。さらに附言すれば、陳独秀の『三大主義』にしても、それはいわば概念的なスローガン臭がつよく、独秀自身もやがて批判を蒙り、戦線から脱落して行く。文学革命運動の当初、魯迅がすでにそのような限界を予見していたとするのは勿論早計にすぎるが、ともあれ、辛亥革命及びそれ以降の革命に対する魯迅の痛切な失望はそのまま文学革命の烽火に対する懷疑あるいは逡巡にまで連らなることは事実であろう。魯迅は、とにかく、スローガン、叫びを好まぬ人である。前引の『我決不是一個振臂一呼応者雲集的英雄。』(『呐喊』序)という感慨がそれを現わしている。

想えば、魯迅の沈黙は一九一二年彼が教育部部員となつて以来のことであり、現在に至るまでおよそ六年の長きを数えるわけであるが、その沈黙の底から立ちあがる機縁を彼に与えたのは折から来訪した錢玄同の勧告であつた。その経緯について、『呐喊』序の記述に従つて述べることにする。

魯迅が補樹書屋において相も変わらず古碑の抄写などに没頭していた八月のある日、友人の金心異(錢玄同)が訪れて来る。錢玄同は魯迅の古碑の抄本をめくりながら、その用途、意味などを訊ねたあげく、文章を書くことを勧める。その勧告に対して魯迅は次のように反問する。『假如一間鉄屋子、是絶無窗戸而萬難破毀的、裏面有許多熟睡的人們、不久都要悶死了、然而只是從昏睡入死滅、並不感到就死的悲哀。現在你大嚷起來、驚起了較為清醒的幾個人、使這不幸的少数者來受無可挽救的臨終的苦楚、你倒以為對得起他們麼？』(『呐喊』序)

この鉄の建物というのは勿論中国である。長い封建の睡りの底に落ちた、いわゆる暮氣沈々たる中国の現状は魯迅にとつて殆んど絶望的ですからある。その現実を前に叫喚することは目覚めかけている少数者にいたずらな苦悶を与えるに終るだけではないか。そのような懷疑、絶

望を魯迅はその体験を通して痛切に感得していたのであつたらう。
『然而』と錢玄同は反駁する。『幾個人既然起来，你不能說決沒有毀壞這鉄屋的希望。』（同）

この反論に対して魯迅は『我雖然自有我的確信，然而說到希望，卻是不能抹殺的，因為希望是在于将来，決不能以我之必無的証明，來折服了他之所謂可有，』（同）

と反駁する。この時の心情を他の箇處においては次のように述べている。『不過我卻又懷疑于自己的失望，因為我所見過的人們，事件，是有限得很的，這想頭，就給了我提筆的力量。』絶望之為虛妄，正与希望相同。』既不是直接对于“文学革命”的熱情，又為什麼提筆的呢？想起来，大半倒是為了对于熱情者們的同感。』（自選集自序）「南腔北調集」

すなわち、魯迅は小説に手をさめる動機を、その長期にわたる失望をふまえてわずかながら希望の曙光を見出す過程及び「新青年」に抛る熱情者達への共感、つまり、封建制、旧礼教の打破等を目指して闘いつつある人びとへの共感に託して説いているわけである。とまれ、絶望に対してすら絶望する、それは必然的に希望への転機であろう。かくして、魯迅は錢玄同の勧告を容れて筆を執つたのである。これが翌一九一八年、文学革命の勝利の実績として或いは中国近代文学の誕生として喧伝される小説「狂人日記」⁷⁹⁾となつて現われるのである。

(五) 結 語

以上、一九〇九年魯迅が留学八年に及ぶ日本をあとに帰国して以後、一九一七年、つまり、小説「狂人日記」発表前までのほぼ九年間における魯迅のありかたをおおよそ年代順に辿つて来たのであるが、

いまその歩みのあとを振り返えてみれば、この九年は、やはり一九一二年の辛亥革命を境界として前期三年、後期六年に分けられるであろう。

前期三年（一九〇九—一一）における魯迅は教員生活に終始するわけであるが、その間浙江兩級師範学堂から紹興中学堂、さらに紹興師範学校と殆んど一年毎にその職場を転々としている。これは勿論辛亥革命をひかえて混乱する時局の影響であろうが、ともかくもそのような中で武昌に革命軍が蜂起し、その勢いは全国にまで波及する。この革命の勃発を魯迅がいかに胸弾ませて迎えたかは想像に難くない。いわゆる滅満興漢の民族革命はかつての日本留学時代から彼がひそかに念願として来たひとすじの道にほかならぬからである。紹興光復に際し、みづから武裝演説隊を組織し、その先頭に立つて活躍した能動的な実践行動はおそらく彼の生涯を通じて極めて数少ない、特記すべき姿態であるとともに彼のひたむきな悲願のあらわな発露ともみられるであろう。

ついで辛亥革命が成り、新しき民国が誕生する。ここにその後期（一九一二—一七）に入るわけであるが、魯迅は新政府下の教育部員として官吏生活に終始する。民国の誕生という、その悲願の達成にもかかわらず、彼はむしろそのような事態の推移とは逆にひたすら内面的な沈潜の度を深めて行くようにみえる。この時期における古書の校勘輯佚、仏經の翻読、古碑の抄写など、それらの工作はそれぞれの意義を内包し、またそれ自体として価値を有しあるいは以後の工作の準備となるものであるが、おしなべていえば、魯迅の内面的沈潜と不可分ではなく、わけても補樹書屋における古碑の抄写などその沈潜の極みとも看取されるであろう。そのような、いわば逆説的な姿態の根由が辛亥革命及びそれ以降の革命の実体に対する彼の痛切な懷疑、失望に連らなることはすでに前述したが、ここでさらに補足的に附言す

れば、当時の革命的文人と沈黙の関連を魯迅はまた次のように述べている。『希望革命的文人、革命一到、反而沈黙下去的例子、在中国便曾有過的。即如清末的南社，便是鼓吹革命的文学团体，他們歎漢族的被压制，憤滿人的凶横，渴望着“光復旧物”。但民国成立以後，倒寂然無声了。』（『現今的新文学的概観』「三開集」）

すなわち、清末に滅満興漢を鼓吹した革命団体、南社の文人達が民国成立以後は逆に沈黙してしまつた、というのである。魯迅がこの南社に所属したか否かについてはなお考証の余地があるが、ともあれ、これは魯迅が自己の体験をも含めての発言であることに相違はあるまい。魯迅のそのような姿態はやがて迎える文学革命の烽火に対する冷やかな反応にまで持ち越され、ついで、錢玄同の勧告による絶望から希望への転機へと推移して行くわけである。従つて、この時期、わけでも後期六年は、それ以前の日本留学時代及びそれ以後の活躍期における魯迅の姿態をいまかりに遠心的外向と名づけるとすれば、これは求心的内向と表現しうるであらう。この時期をもつて、とくに魯迅の沈潜期と称する所以もまたそこにあるわけである。

さて魯迅は小説「狂人日記」を発表して以後、彼自身の表現によれば『一発而不可収』（『呐喊』序）といった、いわば鬱積したものが堰を切つて流れるような勢いで「孔乙己」以下の述作を陸續として発表し、ようやく文学者・作家として定着して行くのであるが、いま、かつての南京及び東京留学時代をも含めて此処に至るまでの彼の歩みを再び回顧した場合、われわれはまずなによりも、それがいかにも屈折の多い、ジグザグな路線であつたことを特筆しなければなるまい。それはおそらく中国近代化の歩み、つまり、すべてが未分化の混沌の中から近代化への過程を辿る際の不可避的な歩みであり、魯迅のジグザグな路線こそまさにそのような過程の如実な体現にはかならないと云いうるであらう。魯迅の視点がたえず時代的前方にそそがれていたと

いうことの意味、彼がつねに先導者、啓蒙者であつたということの意義の一端もまたそれら事象の一つ一つをふまえ、遠心、求心の屈伸作用を見極めた上で確認されなければならないであらう。

註

- 1) この両級は、初級及び優級（高級）である（王士禛「魯迅」）。
- 2) 因みに、江蘇、浙江地方の習俗として、誕生の年を一歳に数えるという（魯迅帰國的年代問題）「魯迅事蹟攷」。従つて、一八八一年に生れた魯迅の二十九歳は一九〇九年にあたるわけである。
- 3) 沈鈞儒（一八七三—）は浙江嘉興の人、字は衡山、清の進士、日本法政大学卒業。法学者として著名。かつて同盟会に加入、浙江の光復運動に参画した。教育司長、上海法学院董事長、律師公会理事長等を歴任。一九三五年救国会を發起し、抗日運動したが逮捕されて入獄、有名な七君子の一人となつた。現在中国民主同盟副主席、最高人民法院院長に任ず。（『新名詞辭典』通聯書局版）
- 4) この同僚はおそらく張柳如という人であらう。喬峯は、その頃魯迅には植物分類学を学んだ張柳如なる友人があり、魯迅が杭州西級師範を去つて以後も、この人は紹興に魯迅を訪ね、連れ立つて植物採集に出かけた旨を伝えている。（魯迅先生和植物学）「略講關於魯迅の事情」
- 5) 喬峯は、魯迅が幼少から非常に植物を愛好し、種々の草花を植え、また「花鏡」「広羣芳譜」等を参照して新しく入手したものを査考したことを述べ、さらに、当時魯迅はドイツの恩格勒（Heinrich Gustav Adolf Engler）の分類法に拠つていたことを伝えている。（同）
- 6) 王士禛によれば、魯迅が担当した学科は初級師範の化学と優級（高級）師範の生理衛生学であるという。（魯迅）
- 7) この「人生象徴」は、始め紹興の魯迅文化館から油印二冊が発見され、ついで一九四九年秋北京図書館に収められた魯迅の遺品の中から発見された。唐駿は京本を定本とし、紹本を参照して校訂したという。（『魯迅全集補遺続編』編校後記）「向魯迅学習」
- 8) かつて一九〇八年、章太炎に就いて「説文」を学んだことがここにも尾をひいている。
- 9) 夏丐尊は、なお、魯迅はこの生殖系統の講義においても、たとえば、也をもつて女陰を「了」をもつて男根を、卒をもつて精子をあらわすというように盛んに古字を使用し、文字学の素養を活用している旨を述べている。
- 10) 孫福熙は浙江紹興の人、字は春台、孫伏園の弟で、かつて日本に留学した。散文、小品文をよくし、「山野掇拾」その他の作品がある。

11) 王士菁は、魯迅が兼任したこの翻譯を博物學（動物學と植物學）としている。（魯迅）「いずれにしても内容は動植物學を指す。」

12) 周遐壽は『第一節裏親連受の祖母之喪説的全是著者自己的事情』（「孤独者」）「魯迅小説裏的人物」と述べている。

13) 周遐壽「祖母」魯迅小説裏的人物」参照。

14) 前引の許寿裳「年譜」には『監學』とあり、魯迅自身は『教務長』と述べている。監學はまた學監とも混用されているが、おそらく教務長の旧称であり、すべて今日の教務主任である。因みに、紹興中學第一回卒業生金の鑑が『子英先生任校長（彼時稱監督）、先生（魯迅）筆者』任學監、即教務主任。（『回憶魯迅先生』）「文芸月報」一九五六・十と述べているのが参照される。

15) 諸議局は一九〇九年九月、各省城に設けられた、省議會のための準備機關である。

16) いま、王士菁「魯迅伝」に拠つて引く。

17) この官僚は、滿洲人の紹興知府である。それについて魯迅は『第二年回到故郷紹興中學去做學監、尤其應該小心的是滿洲人的紹興知府的眼睛、他每到學校來、總喜歡注視我的短頭髮、和我多說話。』（「病後雜談之余」）「且介亭雜文」と述べている。

18) 「魯迅伝覚書」（「北大文學部紀要」6）参照。

19) たとえば、金如鑑は『是時、正滿清末季、革命風潮已弥漫全国、剪髮者嘗引入注目、故子英先生出入均帶飯髻、而先生（魯迅）筆者則不顧。』（「回憶魯迅先生」）「文芸月報」一九五六・十と述べている。なお、魯迅自身は、帰國の途上上海に着いて飯髻髪を注文し、それを一カ月つけてやめにした、と述べている。（「病後雜談之余」）「且介亭雜文」

20) 魯迅「自叙伝略」には『到紹興中學堂去做教務長、第三年又走去。』とみえ、林辰は『一九一一年上季仍留紹中。暑假離職、』（「魯迅帰國的年代」）「魯迅事蹟攷」と述べている。

21) 但し、周遐壽によれば、編訳員云々のことは、一九一二年紹興師範學校校長辭任以後のことと属する。（魯迅与書店）「魯迅の故郷」

22) 魯迅「范愛農」（「朝華夕拾」）に『我被編在師範學校校長的飯碗旁边、…愛農做監學。』とみえる。なお、周遐壽は『紹興光復：聘請魯迅為師範學校校長、范某為副校長、』（「范愛農」）「魯迅の故郷」と述べている。

23) 魯迅「范愛農」（「朝華夕拾」）の中でも同様の趣旨のことが述べてある。

24) 魯迅「范愛農」（「朝華夕拾」）には、發起人として魯迅、陳子英、德清先生の三人があげられている。なお、林辰の「魯迅帰國的年代問題」（「魯迅事蹟攷」）には、周建人（喬峯）が上海文化會の魯迅生誕六十年紀念大会で行った演説（これは民國二十九年八月十五日「星島日報」に掲載されているとい

北大文學部紀要

う）によつて、『在紹興孫德欽辦報、由他主編。』と述べ、この孫德欽は「范愛農」にみえる德清先生と同一人ではないかと疑つてゐる。これについては、喬峯の「魯迅任紹興師範學校校長的一年」（「略講關於魯迅的事情」）と魯迅の「范愛農」とを比較対照すれば、当時魯迅と共に「越鐸日報」に關係し、王金堯の兵に負傷させられた孫德卿（喬峯の文）と德清先生（魯迅の文）とは当然同一人であり、従つて林辰の疑問も解決するわけである。ただ、德欽（林辰の文）と德清のいづれが正しいかは不明であるが、いづれにしても孫德卿（おそらく字である）であることに相違はない。

25) これは「出世辭」といひ、魯迅が黃棘という筆名で一九一二年一月三日該報第一号に書いた。「文芸月報」（一九五六・十）にその全文が再録されている。

26) 周遐壽「太平天国故事」（魯迅小説裏的人物）参照。

27) 魯迅が紹興師範學校校長を辭任した正確な期日は明かにされていない。しかし「越鐸日報」第二号の發刊は一九一二年一月三日であり、該報に載つた軍政府攻撃が魯迅辭任の理由となつてゐるところから、同年一月中のことと推定される。

28) これと同様の趣旨のことを孫伏園は「魯迅先生不久辭了校長。後來知道魯迅先生交代的時候、學校裏只剩了一毛多錢、也從旁聽見軍政府如何欠付學款、及魯迅先生如何辛苦維持。』（「憶魯迅先生」）「懷魯迅」と述べている。

29) 蔡元培は「先生（魯迅）筆者」進教育部以後、我們始常見面。』（「記魯迅先生軼事」）「宇宙風」第二十九期と述べている。

30) 周作人「關於魯迅」に『其輯錄的古小說逸文也已完成、定名為古小說鈞沉、当初也想用我的名字刊行、可是沒有刻板的資料、託書店出版也不成功、至今還是擱着。』とみえる。

31) 越社について唐棣は『越社由南社分設於越、故以越名、以文字鼓吹革命、這是在紹興的一個支流。』（「同」）と説明している。因みに、南社については魯迅も「現今的新文學的概観」（「三間集」）の中でふれているが、清末宣統の初め、柳棄疾、陳去病、葉楚傖らが上海で創設した、排滿を鼓吹した文學團體である。なお、南社について比較的詳説したものに阿英「晚清文藝報刊述略」がある。

32) この學校の名稱を別稿「魯迅伝覚書」（「北大文學部紀要」6）においては周遐壽の推定に従つて鉅路學堂としておいたが、最近の「魯迅全集」（人民文學出版社版）の註解に従つて一応鉅路學堂と訂正する。

33) 許寿裳の「入京和北上」と魯迅の「雜憶」のこの条は措辭その他に甚だしく類似が認められる。おそらく許寿裳は魯迅のこの文章をもとに、往時を追想して記したのであらう。

34) 「魯迅日記」は一九一二年（民國元年）五月五日から一九三六年十月十八

魯迅伝覚書 猪俣

日(死亡前日)までの日記で、計二十四冊、二函が出版された。(一九五一年四月、上海出版公司)。これは魯迅自身も「馬上日記」(『華蓋集統編』)の中でふれているように、もっぱら自分に見せるために書いたもので、手紙及び人物の往来、金銭の出納、書籍の購入など日常生活のメモ程度のことと記されている。一年一冊になつており、本来は二十五冊であるが、その十一冊目、つまり、一九二二年(民・十)が欠けている。これは一九四一年十二月十五日に上海の許広平の寓居が日本憲兵隊に搜索され、彼女が逮捕、入獄させられた時に紛失した。馮雪峯は、この一冊は現在ではもはや探し出す希望は殆んどないといひ(『魯迅日記序』)、許広平は、この中間の一冊を失つたことは魯迅の文学生涯を研究する上で補償すべからざる損失であると述べている(『研究魯迅文学遺產的幾個問題』「欣鬱的紀念」)。

許寿裳も「入京和北上」(『亡友魯迅印象記』)においてこのことを述べている。許寿裳はこの講演について『魯迅在民元教育部暑期講演會、曾演講美術、深入浅出、要言不煩、恰到好处。』(『提倡美術』「亡友魯迅印象記」)と述べているが、『魯迅日記』と参照すれば、その始めは六月二十一日午後四時から五時までで、聴講者三十人、中途退去者五、六人とみえる。なお、これは七月十七日終了まで計五回行なわれた。魯迅が哀詩三首を詠じたのは七月二十二日の夜であり(『魯迅日記』)、従つて、この日は二十三日であらう。

『民興日報』は前述の「越鐸日報」から分裂して李霞卿等が出した新聞である。詳しくは周啓明の同書参照。この食事を朱正は次のように註解している。『當時北京政府各部都設有食事這個官職、其地位大体在司長与科長之間。』(『魯迅略伝』)王士菁「魯迅伝」に拠つて引く。

この辛亥革命及びそれ以降の革命の不徹底さに対する失望を魯迅はまた「其末這也不是新添的壞、乃是塗飾的新漆剥落已尽、于是旧想又顯了出來。……是什麼什麼、招牌雖換、貨色照旧、全不行的。』(『阿地書』)と述べている。

唐毅の推定に拠る。唐毅は、この序は後一九五〇年十一月一日、重慶の「大衆文芸」(第一卷第六期)に掲載された述べ、魯迅はこれを「一九一三年三、四月の間に書いたと推定している。(魯迅全集補遺統編)参照。魯迅は「集外集」の序文の中で、若い頃は嚴又陵(復)に影響されたが後にはまた章太炎に影響された旨のことを述べている。章太炎の文章は魏晉の筆調、風格をもつて称せられるが、この章太炎、魯迅、魏晉文章の關係については、王瑤の「論魯迅作品与中国古典文学の歴史聯繫」(『文芸報』一九五六年、第十九号、魯迅紀念專号)が詳しい。

これは魯迅が漢末魏初の文章の特色として、清峻な風格——つまり文章が簡約嚴明になつたと述べている(『魏晉風度及文章与秦及漢之關係』)に拠つた。これはトルストイの人道主義、ニーチェの個性發展の超人思想等を意味する。

いま王瑤「魯迅与中国文学」に拠つて引く。魯迅は竹林七賢について「他們七人中差不多都是反抗旧礼教的。」「(魏晉風度及文章与秦及漢之關係)「而已集」」と述べている。

魯迅のそのような態度は、たとえば、彼自身が「就是思想上、也何曾不中些在周・韓非的毒、時而很隨便、時而很峻急。孔孟的書我認得最早、最熟、然而倒似乎和我并不相干。」「(『写在『墳』之後面』「墳」)と述べ、また周作人が「予才從小喜歡、雜覽、讀野史最多、受影響亦最大、」「(『關於魯迅』)と述べていることからその一端が窺われよう。

その内容は(一)何為美術(二)美術之類別(三)美術之目的与致用(四)播布美術之方であり、この年の二月、教育部の「編纂処月刊」(第一卷第一冊)に掲載。この年の八月、同月刊(第一卷第七冊)に掲載。この年の十一月、同月刊(第一卷第十冊)に掲載。なお以上四種はすべて唐毅編「魯迅全集補遺統編」に収録されている。

許寿裳は、章太炎と魯迅の仏教に対する見解の違いについて、許寿裳が一九三六年章太炎の死を紀念して書いた「紀念章太炎先生」の中に、章太炎の『以仏法救中国』なる句を引用したのに対して、魯迅は九月二十六日(即ち病歿二十四日前にあたる)に許寿裳の意見に賛成せず、『得「新苗」、見兄所為文、甚以為佳、所未敢苟同者、惟在欲以仏法救中国耳。』と書き送つたことを伝えている(『看仏經』「亡友魯迅印象記」)。

「魯迅伝覚書」(北大文学部紀要)6。参照。なお、周啓明(作人)はつづけて「弘明集」中の梁の范缜の「神滅論」を例にあげ、それが魯迅に唯物思想の根を植えつけ、その後、科学知識、マルクス・レーニン主義と結びついて、魯迅の思想がますます確定した旨を述べている。これは最近の魯迅評論の素朴な原型の一つであるように思われる。

この二つは熱心な読者が寄せたものを許景宋から借りて録存したという(唐毅「編後記」「魯迅全集補遺」)。「会稽郡故書雜集」は謝承「会稽先賢伝」、虞預「会稽典録」、鍾離岫「会稽後賢伝記」、賀氏「会稽先賢像讚」、朱育「会稽土地記」、賀循「会稽記」、孔靈符「会稽記」、夏侯曾先「会稽地志」以上八種を含む。

その「重訂魯迅著訳書目」に「会稽郡故書雜集八五張一九一五・二月

周氏蔵版」とみえる。

69) 周作人は一九一二年に帰国し、浙江省教育司の省視学を半年程つとめ、以後は紹興の中学教員を四年程つとめ(一九一六年まで)、いわゆる鳴かず飛ばすの時期であつた。

60) いま、松枝茂夫氏訳「魯迅について」(周作人隨筆集)の追記に拠る。魯迅翻刻の書に拠つて、一九五五年八月、文学古籍刊行社から出版されている。

61) 60) 胡冰の記録によれば、この年(一九一五)に魯迅が購入した金石文字関係書は二十四種に達する(同)。

62) これは一九一五—一八年度までの時期を指す。(胡冰「魯迅対石刻画像的搜集与研究」「魯迅研究札記」)

63) 創作と批評云々は翌々年(一九一八)に「新青年」に発表した「狂人日記」及び評論(隨感)等を指す。

64) たとえば、胡冰はこの年(一九一六)七月、魯迅が琉璃廠へ足を運んだ回数(十二回と計算しており「魯迅対石刻画像的搜集与研究」)「魯迅研究札記」、「魯迅日記」と対照されるが、殆んど隔日に一度の割合である。因みに、魯迅が最もよく訪れた留聲機の店は、徳古斎、教古誼帖店、訪古斎、耀文堂等である(胡冰の同書及び「魯迅日記」参照)。

65) 啓明は、周作人が使っている筆名の一つでもある。たとえば、本稿にも引用したが「魯迅的青年時代」の筆名は周啓明である。

66) この人物の名を周遐寿(作人)は秘しているが(「狂人は誰」——魯迅小説裏の人物)、「魯迅日記」には明記してある。

67) この「絶命書」はいま北京の魯迅博物館に保存されているという。王士菁「魯迅」にはその一部が引用されている。

68) 阮久孫に言及したものは周遐寿(「狂人は誰」——魯迅小説裏の人物)、王士菁「魯迅」及び「魯迅日記」があり、いまそれらに従つて略記した。

69) その奇怪な言動のいくつかは周遐寿及び王士菁の書に述べてある。

70) 周作人は四月一日北京へ来て、北京大学附属国史編纂所編纂員になつた。齊寿山、名は宗頤、教育部における魯迅の最も親しい同僚の一人である。

71) 後一九二五年、魯迅が章子釗によつて免職させられた時、彼は許寿裳とともにこれに憤慨し、辞職した。また、一九二八年、未社月刊「小約翰」(オランダ、ヴァン・エーデン原作)を魯迅と共訳した。

72) 竹内好氏著「魯迅」(世界評論社版)の「年譜」には「七月はじめ張勳の復辟事件がおこり、憤慨して辞職したが、同月乱がおさまつたので復職。」とみえる。これは許寿裳編「年譜」の「離職」を直ちに辞職と解したのであろう。しかし、当時の情勢、たとえば新華旅館への避難等を考えれば、少くとも正式の辞職ではなく、一時職場を離れたという程の意味に解されよう。従

北大文学部紀要

つて、「復職」というのも妥当ではなく、「返部」(許寿裳「年譜」)というのは(乱が鎮定して)教育部へ返つた、意味であらう。なお、「魯迅案内」(岩波書店版「魯迅選集」)の「魯迅年譜」も竹内氏の踏襲している。

73) いわゆる八不主義とは(一)須言(有物)、(二)不摹倣古人、(三)須講求文法、(四)不作無病之呻吟、(五)務去爛調套語、(六)不用典、(七)不講對仗、(八)不避俗字俗語(胡適「文学改良芻議」)をいう。

74) いわゆる三大主義とは(一)推倒雕飾的阿諛的貴族文学、建設平易的抒情的国民文学、(二)推倒陳腐的舖張的古典文学、建設新鮮的立誠的写实文学、(三)推倒迂晦的艱澁的山林文学、建設明瞭的通俗的社會文学(陳独秀「文学革命論」)をいう。

75) わずかに内容にまで言及しているものとしては前註74)の(一)、(二)、(四)のみである。

76) 魯迅と錢玄同の以下の對話を、周遐寿は、張勳復辟事件後の八月九日、十七日に錢玄同が来訪した折のことであらうと推測している(「補樹書屋旧事」——魯迅的故家)。これを「魯迅日記」と参照すれば、八月九日の条には「下午錢中季来談至夜分去」とあり、十七日の条には「……晚錢中季来」とみえる。

77) 金心異は錢玄同を指す。当時林琴南が上海の「新申報」に発表した小説「荆生」の中で、錢玄同をモデルにした人物の名を金心異としたが、魯迅はこれを借用したわけである。因みに、この小説は荆生なる人物が田必美(陳独秀)、金心異(錢玄同)、狄莫(胡適)をそれぞれ罵倒するストオリである。

78) この「狂人日記」に至つて始めて魯迅というペンネームが使用された。従つて、これは文学者——作家魯迅の誕生を意味するとも云いうるわけである。

79) 王治秋は、魯迅が宋紫佩(紹興中学堂での学生の一人)の紹介で南社に入したと述べ(「辛亥革命前的魯迅先生」)、また、朱正も「在這個時候、他還参加了与光復会有聯系的傾向革命文学团体、南社。」(「魯迅略伝」と述べ、魯迅が南社に所属したことを肯定している。魯迅がこの南社の紹興支社である越社発刊の「越社叢刊」第一集に「古小説鈞沈序」を発表した事実はあるが(前註30本文参照)、南社所属の具体的な根拠はなお未詳である。

附
録

魯
迅
年
譜
補
遺

——その沈潜期を中心として——

西暦(中国) 日本	1909(宣統元) 明治42	1910(宣統2) 明治43	
[年齢]	[29]	[30]	
魯迅事蹟	2月(陽3月)『域外小説集』第一冊出版(魯迅訳はアンドレエフ『護』『緊』) 6月(陽7月)同第二冊出版(魯迅訳はガルシン『四日』) 6月(陰)帰国し、浙江两级(初級・高級)師範学堂(教務長は許寿裳)の生理学・化学の教員となる。その他、日本人教師の講義(生物学)の翻訳及び通訳を担当し、又、植物採集、標本作製、分類に没頭する。	4月5日(陽5月13日)祖母蔣太君死、六十九歳。帰郷し、葬儀万端をとり行う。 夏 師範学堂を辞任、帰郷す。 8月(陰)紹興中学堂(校長は陳子英)の教員兼監学(教務主任)になり、生理衛生を担当。このころ、辮髪問題を介して学生と紛糾。	夏 紹興中学堂を校長陳子英とともに辞任。
中国 文化界の動向	③「小説時報」(狄葆賢・有正書局)創刊(9) ⑤『拝輪詩選』(バイロン・蘇曼殊訳・日本三秀堂) ⑥『曲録』(王国維・長風閣) ⑥勞乃宣、北京に簡字研究会を設く。 ⑦陳独秀、日本に留学。殷夫生。	③「小説月報」(王韞章・商務印書館)創刊(7) 「南社」(陳去病、柳詒子・南社同人)創刊。 ⑦劉勰、呉趺人死。	②武昌に文学社成立(振武社が軍隊同盟会と群治学社とを吸収せるもの。武昌拳兵の有力な母胎
外国 文学	①「スバル」創刊(1) 『ふらんす物語』(永井荷風・博文館)(3)発禁。 △それから△(夏目漱石・「東京朝日」)(6)△キタ・セクスアリスV(森鷗外・「スバル」)(7)発禁。 『田舎教師』(田山花袋・佐久良書房)(10) 自由劇場設立(11) 二葉亭四迷死。	①△家V(島崎藤村・「読売新聞」)(1) △人形の家V(イブセン・島村抱月訳・「早稲田文学」)(1) △門V(夏目漱石・「東京朝日」)(3) 「白樺」創刊(4) 「三田文学」創刊(5) △時代閉塞の現状V(石川啄木)(8) △沈黙の塔V(森鷗外・「三田文学」)(11) 『一握の砂』(石川啄木・東雲堂)(12) ②トルストイ死。	①△或る女V(有島武郎・「白樺」)(1) △七七死刑囚物語V(アンドレエ
歴 史 的 背 景	①立憲準備を公布(2) はじめて日貨排斥運動起る(7) 張之洞死(8) 国会請願同志会成立し、各地に国会速開運動起る(11) ②伊藤博文、ハルビンにて暗殺さる(10) 東京弘文学院閉校。 ③韓国、司法および監獄事務を日本に委託(7) ロシア、レーニン『唯物論と経験批判論』	①汪兆銘ら摂政暗殺未遂事件(1) 黄興らの広東新軍の起義(1) 国会開設期を一九一三年と決定公布(11) ②幸徳秋水らの大道事件の検挙はじまる(6) 日韓併合(8)	①黄興ら広東に拳兵(3) 四国銀行団に六百万ポンドの鉄道借款を調印、鉄道国有化を宣

1912(民国元年)壬子 [32]	1911(宣統3)辛亥 [31]
1月 中華民国臨時政府南京に成立(1日) 蔡元培教育総長に就任(3日) 許寿裳(教育部員)を介して招聘され、南京へ赴いて教育部員となる。 以後、古書の校勘輯佚の工作にあたる。 2月 『古小説鈎沈』ほぼ完成、その序を「越社叢刊」第1集に発表。 このころ、満清駐防旗營の廃趾を訪ね、感慨にふける。 5月 政府の移転に伴い、海路北京へ赴き(5日)、紹興県館(宣武門外南半截胡同)の藤花館に居を定む(6日)。	9月14日(陽11月4日) 杭州光復。この報紹興に及び、城内に慶祝大会が開かれ、主席に推挙される。武装演説隊を組織し、革命の宣揚、民心の鎮定につとめる。 9月(陽11月) 王金堯軍紹興へ入城、紹興光復成る(9・16)。 王金堯、都督に任ず。 王金堯より紹興師範学校校長を委嘱さる。(范愛農、該校の学監に就任)このころ、「越鐸日報」の発起人の一人となる(発刊詞を翌年1月第1号に載す。筆名は黄棘)。 冬 最初の小説『懷旧』を試作。 紹興中学堂辞任後、ある書店の編訳員になろうとしたが失敗(自伝による)。
② 胡敦復ら、上海に大同学院を創立(3) 教育統一会成立(5) 京師大学堂、北京大学と改称(11) 陸費逵、上海に中華書局を設立(12) ③ 「独立週報」(章士釗・其杜)上海にて創刊(9) 「庸言」(Justice)(梁啓超)天津にて創刊(12) ⑤ 「辛亥革命始末記」(渤海寿民編) 『中国秘密社会史』(平山周著・商務印書館編訳所訳) 『浙江革命記』(顧乃斌・浙軍第四十九旅司令部印本) △革命団体文学史的歴史▽(文	となる)。 ④ 「上下古今談」(呉敬恒・文明書局) ⑥ 中央教育会議にて、統一国語弁法案議決。
① 『悲しき玩具』(石川啄木・東雲堂)(6) △行人▽(夏目漱石・「朝日新聞」)(12) 石川啄木死。 ③ タゴール『ギーターンジャリ』ストリンドベリー死。	フ・相馬御風訳・「早稲田文学」 (4) △呼子と口笛▽(石川啄木・「創作」)(7) 大逆事件の文学者への影響が大きくなる。
① 孫文、南京にて中華民国臨時大總統に就任し、中華民国正式成立。直ちに参議院成立(1) 清宣統帝、退位を宣布(2) 孫文、臨時大總統を辞し、袁世凱代つて就任(2) 中華民国臨時約法公布(3) 北京に遷都(4) 津浦鉄道全線開通(7) 同盟会、統一共和党、国民共進会など合組して国民党成立、孫文を理事長に推挙(8)これより、国民党と北洋軍閥の対立時代にはいる。 ② 東京市電スト(1) 美濃部、上杉憲法論戦(7) 大正改元(7)	布(5) 各地に鉄道国有反対運動起る。 四川省保路同志会の暴動(7) 辛亥革命起る(武昌拳兵、続いて各省独立を宣言)(8)(陽10月) 袁世凱、総理大臣に就任(9) 各省代表、南京に集り、黎元洪を大元帥に、黄興を副元帥に推挙(10) 孫文帰国(11) 各省代表、南京に集り、孫文を中華民国臨時大總統に推挙し、陽曆採用を決定、11月13日を中華民国元年元旦となす(11) ② 幸徳秋水ら処刑さる(1) 社会党禁止(10)

1913(民国2)癸丑 [33]	
10月 教育部社会教育司第一科科长に任ず。 5月5日 この日から、いわゆる『魯迅日記』をつかはしめる。 6月21日～7月15日 夏期講習会にて『美術略論』を講演(計5回)。 7月 12日附作人の手紙により范愛農の水死(10日)を知り(19日)、『哀詩』三首をつくる(22日)。 8月22日 教育部倉事に任ず。 この年、余暇に『謝承後漢書』を纂輯。	1月 △懷旧V(小説月報) 第4巻第1号・筆名は周連) 2月 △擬播布美術意見書V(教育部「編纂処月刊」第1巻第1冊) 3月27日 『謝承後漢書』の纂輯成る。 3、4月の間に同書序を書く(唐叟の推定による)。 6月 休暇を得て津浦線經由帰郷(19日発、24日着)。 8月 海路北京に帰る(7月27日発、8月7日着)。 8月 △芸術鑑賞之教育V(上野陽一著・教育部「編纂処月刊」第1巻第7冊)
②黄興、宋教仁ら北京に国民大学を創立(3) 上海に、中国最初の映画会社亜細亜影片公司(後の明星公司)生る。 ③「不忍」(康有為・広智書局)上海にて創刊(2) 「孔教会雑誌」(陳煥章)北京にて創刊(2) 「Hina Socialisto」[Popola Voco](共にエスベラント雑誌)創刊。 ⑧教育部読音統一会開会(呉敬恆王照が正副会長)、注音字母三十九を制定(2) ⑦馬相伯、北京大学校長に就任。梁啓超、司法総長に就任。	学社同人・「民立報」 ⑥読音統一準備会(呉敬恆主任)設立。 ⑦嚴復、北京大学校長に就任。
①『生の要求と文学』(片上伸・南北社)(5) 『赤光』(齊藤茂吉・東雲堂)(10) 岡倉天心死。 ②ゴリキ『幼年時代』 ③タゴール、ノーベル賞を受く。	
①外モンゴル及びチベットと条約を締結、相互の独立を承認(1) 宋教仁、上海にて暗殺さる(3) 袁世凱、議会の承認を経ずしていわゆる善後借款に調印(4) 第二革命起る(李烈鈞らの反袁軍華南に蜂起(8) 袁軍、南京を攻略して第二革命終る(9) 袁世凱、日本の満洲における鉄道敷設権を承認(10) 袁世凱、黎元洪、正式に正副總統に就任(10) 袁世凱、国民党の非合法化を宣言、ために国会停頓状態に陥る(11) 中露、外モンゴルの自治を承認の共同宣言(11) ②サンジカリズム研究会成立(7)	

1915(民国4年)乙卯 [35]	1914(民国3年)甲寅 [34]	
1月 『百喻經』の翻刻完成。 2月 『会稽郡故書雜集』を輯成、周作人の名義にて出版。 この年、公務の余暇に、金石拓本の蒐集をはじめ。	この年、公務の余暇に仏經を翻読す。 △芸文雜誌▽『越鐸日報副刊』筆名は周予才 △百草書屋副記▽（同右・筆名は巴人）	公務の余暇に『嵇康集』を校勘。 △社会教育与趣味▽（上野陽一著・「編纂処月刊」第1巻第9冊） 11月 △社会教育与趣味▽、△兒童之好奇心▽（同右・第10冊）
② 国子監南学房舎を京師圖書館とす。 ③ 「大中華」（梁啓超）上海で創刊(1) 「小説海」（黄山民・上海中国圖書公司）創刊(1) 「青年雜誌」（陳独秀・羣益書社）上海で創刊(9) ⑥ 注音字母伝習所を試弁。	③ 「甲寅」（章士釗・月刊）東京で創刊(5) 「小説叢報」（徐沈亜・國華書局）創刊(5) 「禮拜六」（鈍根・中華圖書館）創刊(6) 「清華學報」（清華學校師生所・季刊）創刊(11) ⑦ 胡適、コーネル大学に入学。 郭沫若、日本に留学。	
① △あらくれ▽（徳田秋声・「読売新聞」）(1) △その妹▽（武者小路実篤・「白樺」）(3) △宣言▽（有島武郎・「白樺」）(6) △羅生門▽（芥川竜之介・「帝國文学」）(9) 片上伸、ロシアへ留学。 長塚節死。 ③ ロマン・ロラン、ノーベル賞を受く。 D・H・ロレンス『虹』	① △心▽（夏目漱石・「東京朝日」）(4) 第三次「新思潮」創刊(2) エロシエンコ来日。 ③ ジョイス『ダブリン市民』（意識の流れの小説、これよりさかん）	
① 日本政府、二十一カ条の要求を提出(1) 日本の最後通牒、袁世凱これを承認(5) 排日運動各地に起り、留日学生一齊帰国。 袁世凱の帝制準備機関として籌安会発起(8) 全国請願聯合会、北京に成立、参政院に国体変更を要求(9) 国民會議代表、袁世凱を皇帝に推戴すべく投票、袁これを承けて、翌年を洪憲元年と改元すべく下令(12)	① 袁世凱、国会を解散(1) 中華民國約法公布(5) 孫文、東京で国民党を改組し中華革命党を組織、總裁に推挙する(7) 第一次世界大戦勃発(7) 中立を宣言(8) 日本軍、山東省に上陸(9) 青島を占領(10) ドイツ軍投降(11) ② 日本軍、山東省及び南洋出兵(8) ③ レーニン、戦争を内乱へと宣言(11)	

1917(民国6)丁巳 [37]	1916(民国5)丙辰 [36]
1月 北京に帰る(3日発、7日着)。 4月1日 周作人を郷里から迎える。 7月 張勳の復辟運動おこる。その紛擾のため、職場を離れ、作人と共に新華旅館(東城船板胡同)に避難(7日~14日)。ほぼ二週間で鎮定したので、再び教育部に戻る(16日)。 8月 この月以後、錢玄同の頻繁な訪問をうける『呐喊』自序にみえる会話は、おそらく8月9日、17日の訪問の際に交わしたものであろう(周作人の推測)。	1月 『蜩螗印存序(代)』を書く(翌年「姦社叢刊」第4期に発表・筆名は啓明)。 5月6日 紹興県館内の補樹書屋に移る。 10月30日 従兄弟の阮久孫来訪(山西で幕友をしていたが、被害妄想症のため北京に逃げて来たもの。のちの『狂人日記』の素朴なモデルとなつている)。 12月 休暇を得て津浦線經由帰郷(3日発、7日着)。 この年も、造象及び墓志拓本を蒐集研究す。
① 文学革命運動おこり、「新青年」を中心に激しい論争。 ② 中国公学、中国大学と改称。 ③ 「小説画報」(包天笑・文明書局)創刊(1)。 ⑤ ▲文学改良獨議(胡適・「新青年」第2巻第5期)(1)。 ▲文学革命論(陳独秀・同右第2巻第6期)(2)。 ▲歴史的文学觀念論(胡適・第3巻第3期)(5)。 ▲我之文学改良觀(劉半農・同右)(5)。 『飲冰室叢書』(梁啓超・商務印)	② 留日学生、丙辰学社を組織。 ③ 「民鐸」(李石岑・中華學術研究会)東京にて創刊(6)。 「青年雜誌」第2巻以後「新青年」と改称。 ⑥ 北京に中華民国国語研究会成立。 ⑦ 蔡元培、北京大学校長に就任。
① ▲父帰る(菊地寛・新小説)(1)。 ▲カインの末裔(有島武郎・「新小説」)(7)。 ② ザメンホフ死。	① ▲或る青年の夢(武者小路実篤・「白樺」)(3)。 ▲明暗(夏目漱石・「東京朝日」)(5)。 ▲貧しき人々の群(中条百合子・「中央公論」)(9)。 ▲出家とその弟子(倉田百三・「生命の川」)(12)。 民衆芸術論おこる。 夏目漱石、上田敏死。 ③ カフカ『変身』。 フロイト『精神分析入門』。 シエンキヴィチ死。
③ ロシヤ、二月革命及び十月革命。社会主義政權樹立。 アメリカ、対独宣言。	蔡鐸ら反袁軍各地で挙兵(12)。 ① 袁世凱、全国的反対のため帝制を取消す(3)。 袁世凱急死し、各省独立を取消し、黎元洪政府を承認(6)。 国会回復(8)。 蔡鐸、黄興死(12)。 ② 吉野作造の論文をめぐつて、デモクラシーの風潮強くなる。

魯迅年譜補遺

この年も拓本蒐集及び研究をつづける。

書館)

⑥ 国語研究会第一回大会。

⑦ 陳独秀、北京大学文科科長に就任。

胡適、周作人、北京大学教授に就任

報」(一九五六・十)及び「文芸報」(一九五六・第十九号魯迅紀念專号)から採録した。

1. 「中国文化界の動向」は、①一般的動向、②学校・書店・文化団体、③新聞・雑誌、④小説・戯曲、⑤詩歌・評論、⑥国語運動史、⑦文化人の動静・生卒に、「外国文学」は、①日本、②ロシア、③その他に、「歴史的背景」は、①中国、②日本、③その他に、それぞれ細分した。
 2. 「」は新聞・雑誌名、『』は単行書名、△▽は雑誌等に発表された場合、その下の()内は編著者・出版発行所・備考を記す。
 3. 「中国文化界の動向」「外国文学」「歴史的背景」の各項目の下の()内数字は月を示す。
 4. 暦は、一九一一年まで特記せざる限り引換した資料の関係上、陰暦を踏襲した。なお、日本及び外国の場合は陽暦である。
 5. 本年譜は、本文に引用したもの以外に、主として次の資料に拠った。
 - 「魯迅先生年譜」(雪葦「魯迅散論」新文芸出版社)
 - 「魯迅業績年表」(志賀正年、天理大学学報)
 - 「魯迅年譜」(「魯迅案内」「魯迅選集」別巻、岩波書店)
 - 「中外歴史年表」(翦伯贊他編、生活読書新知三聯書店)
 - 「辛亥革命」(中国史学会編、中国近代史資料叢刊、上海人民出版社)
 - 「辛亥革命先著記」(楊玉如編、科学出版社)
 - 「辛亥革命史料」(張国淦編、竜門聯合書局)
 - 「中国新文学大系」史料・索引(阿英編、良友圖書公司)
 - 「晚清戯曲小説目」(阿英編、上海文芸聯合出版社)
 - 「晚清文芸報刊述略」(阿英、古典文学出版社)
 - 「中国報学史」(戈公振、生活読書新知三聯書店)
 - 「国語運動史」(黎錦熙、商務印書館)
 - 「三十年来中国文化界年表」(中国文学研究会編、「中国文学」第七十七号所載)
- 附記：本「年譜」は本文の参考として符録したが、今後更に補訂するつもりである。また、魯迅関係写真十葉は「魯迅図片集」(人民美術出版社)「文芸月